# 現代文新鈔

1

375.9
Y019
資料室

41982
教科書文庫
4
810
41-1924
200030
2229

資料室

教科書文庫
4
810
41-1924
2000302229

375.9
Y019

吉田彌平編

# 現代文新鈔

卷一

東京
光風館藏版

## 緒言

本書は中學校の國語讀本に副へて清新な讀みものを供給する目的で編纂したものでございます。

趣味の豐かなもの、表現の巧なもの、感激に滿ちたもの、暗示に富めるもの、本書は務めてかういふ材料を擇びました。

現代の文學は青年の心に共鳴し同感する點に於て極めて力强いものであると同時に、指導と啓發とを要することも甚だ切なるものがあるやうに思はれます。本書はこの點に於て出來るだけの用意を致したつもりでございます。

何と申しても現代の文化を十分に受用するためには、現代文の生き生きしたものを讀まねばなりません。本書は常に增修補訂を怠らず必要に應じて版を改めるやうにして、始終時代の進歩から置き去られな



廣島大學圖書之印
廣島大学 教 43500 図書
広島大学図書
2000302229

い注意を取るつもりでございます。

原文に對しては十分の敬意を表してをりながら、なほ多少の手を加へて體裁を整へねばならなかつたこともございます。これは甚だ不本意のことでございますが本書の性質上まことに已むを得ないことゝして諸家の寛恕を請ふ次第でございます。

大正十二年一月

過去一年の經驗により、一二の文章を除き、更に新しい材料を加へて多少の修正を試みました。

大正十二年十一月



# 現代文新鈔 卷一

## 目次


一 佐久良東雄 …… 一

二 勸ちやん …… 長谷川二葉亭 一一

三 わが少時 …… 大町桂月 一四

四 エルサレムの燕 …… 徳富健次郎 二九

五 葉つぱ・里ごころ …… 北原白秋 三〇

六 蜘蛛の絲 …… 芥川龍之介 三四

七 金剛杖 …… 江見水蔭 四二

八 難船 …… 相馬御風 五〇

九 漁師 …… 北原白秋 五四

一〇 大地震……久米正雄 五九
一一 銀座哀唱……西條八十 六八
一二 靜雄の家……田山花袋 七一
一三 明月の影を二つに割つて……五十嵐力 九〇
一四 名工柿右衞門の村を訪ふ……吉田絃二郎 九二
一五 綱引……新渡戸稻造 一〇六
一六 貨幣礫……三浦修吾 一〇九
一七 敵機に同乘して……一一三
一八 猫……夏目漱石 一二一
一九 鴨……大谷繞石 一二五
二〇 花咲爺……武者小路實篤 一三[illegible]




廣島大學圖書之印

# 現代文新鈔 卷一

## 一 佐久良東雄

我が國の花にはうるはしいのが澤山あるが、中にも花の中の花として世の人にもてはやされるのは、何といつてもやはり櫻の花である。その櫻の花を愛して、自分の苗字にした人がある。それは佐久良東雄といふ今から六十餘年前に國事に斃れた志士である。

この人は東京から二十里ばかり東北、有名な霞浦に臨んだ土浦の町續き、眞鍋町の善應寺といふ寺に居た、もとは良哉といふ坊さんであつた。良哉は文化八年に土浦から北へ五里、筑波山の東に當る柿岡町の在、浦須村の農家に生れた。九つの時から隣の下林村觀音寺の住持康哉の弟子

釋契沖 大阪の國學者 萬葉集を研究して代匠記を著した 元祿十四年(二三六一)寂 年六十二

になつて、良哉といふ名をもらつた。 老僧康哉は常に心を皇室に傾けて居た人で、又萬葉集の歌が好きなところから、釋契沖の人となりを慕つて居た。 世間では康哉を萬葉法師と呼んだ。 小僧の良哉も、見やう見まねで、十四の年に

いくつねて春はくるやと父母に、
問ひし昔もありにしものを。

などと詠んだ。 長ずるまゝに萬葉が好きになり、師匠が死んでからも始終歌を詠んだり、又古い歌や、歴史をしらべたりして居た。

一體日本の國柄は、調べれば調べるほど外國と違つて居る點が著しくなつて來る。 良哉も古い歌をしらべ、古い歴史をしらべて、深く悟る所があつた。 日本の國が有りがたく貴いいはれ、又皇室の貴い事、有りがたい事を深く知つた。 それでどうかして幕府を倒し、天皇の大御心をお安め申上げようと思ひ立つた。 自分も何とかして京都へ上りたい、京都には天





土屋侯 土浦藩主 土屋寅直

皇が入らせられる、早く京都へ上りたいと、明けくれ思つてゐた。 この頃は徳川幕府の末で、世の中が追々に亂れて來た時であつた。

二十五の年に善應寺の住職に轉じた。 その翌年は凶作であつたので、良哉は自分の貯はもとより、長持に二棹あつた藏書を皆賣拂つて困窮の人に施した。 で、土屋侯から厚く賞せられた事もあつた。

寺の後の小高い丘は、富士と筑波を左右に眺め、霞浦はすぐ脚下に見下す風景のよい處であつた。 それゆゑ土屋侯を始め、當時の名士がよく遊びに來られた。 中には國事について祕密に相談をするものもあつた。 水戸の藤田東湖などもその一人であつた。 しかし良哉は農事の忙しい時には戸を立て切つて、誰が風景を見に來ても上げなかつた。 そして「あんなに農民が汗水を流して働いてくれるのを高みで見物するには忍びない、強つて見たければその處へいつて見るがいゝ。」といつた。

良哉は多くの學者や名士と親しくなるにつけて、追々自分といふものを

ある日　天保十四年良哉が三十九の時

見つめる様になつた。そして、何だか自分の境遇に不安が起つた。今日の時世は、こんな事のして居られる時ではないと、つく〴〵考へる様になつた。

ある日の事、良哉は村中へふれた。「明日はお寺で不思議な事があるから、見に來るがい〻。」これを聞いた村の人は皆、何があるのか知らんと、その日の朝早くから、誘ひ合つて、寺へ來た。來て見ると驚いた、寺の庭のまん中で、住職は寺男に薪を山のやうに積ませてそれをもやしてゐる。その四方には竹をたて〻、注連繩が張つてある。よく見ると、何も煮るのでなし、湯を沸かすのでもないらしい。村人は何事だらうと不思議に思つて見て居た、やがて住職は「皆さん御苦勞でござつた。私は今日から坊主をやめて、御國の爲に盡さうと思ふのぢや。」といつて、お經を一遍讀むや否や自分の着てゐた袈裟・衣を脱ぎすて〻、いきなり炎々と燃え上つてゐる焰の中へ投入れた。村人はあれよ〳〵と驚いてゐる間に、袈裟も衣もめ

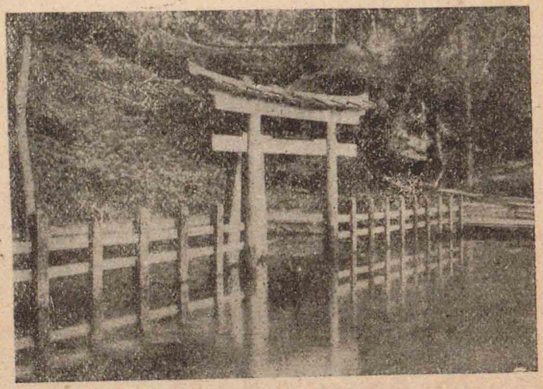


色川三中　通稱三郎兵衛　國學者　土浦の人　安政二年(一八五五)歿　年五十四

鹿島神社　常陸國鹿島郡宮中村にある　今官幣大社

ろめろと、燃えてしまふ。良哉は、そのま〻裸體で寺から駈下りて町へ出た。そして、一目散に土浦の色川三中の家へいつて新しい衣服をもらつて着用し、汚れた身を清めるといふので、霞浦を船で渡つて、鹿島神社に詣つた。

鹿島の社には有名な御手洗の池といふ清い泉がある。其處に七日の間水垢離をして、身をも心をも洗ひ清め、やつと安心して、拜殿のはるか下の方に荒薦を敷いて、神前に祝詞をあげた。そして神德を謝するために同社の境内に櫻を千本植ゑた。今でも東雄櫻といつて殘つて居る。さて自分はもう僧侶ではないのだから、色色考へた末、かね〴〵好きな櫻を苗字にして、名は東雄ときめた。



鹿島神社御手洗池

東雄は平素大君のおはします京の地を慕ひ、「たとひ飴賣になつても京に

住へれば本望だ。」と口ぐせの様にいつて居たが、弘化二年年月あこがれてゐた京都へ上ることになつた時の歌に、

一歩み歩めば歩むたびごとに
都へ近くなるが嬉しさ。

さて京都に着いて、

現神わが大君のおはします
都の土はふむもかしこし。

又將軍の居城たる江戸城の立派さに引きくらべて、京都の御所の粗末なのを憤慨して、

今に見よ、高天の原に千木高知り
瑞のみあらかつかへまつらん。

それから數年の間、色々と國事に就いて力を盡した。その國を思ふ心がなみ／＼でない上に、古歌や歴史に詳しく、歌も上手に詠むので、佐久良東



伊井大老 名は直弼 彦根藩主

唐丸籠 平民で重罪を犯したものを護送するときに用ひる駕籠 唐丸はシヤモの一種大きくて喧嘩に强いこれを飼ふ籠に似て居る故の名

雄の名は、志士の間に誰知らぬものもなかつた。

處が突然東雄は幕吏に捕へられて、牢に入れられる事になつた。時は萬延元年春三月、桃の節供の三日の日、珍しく大雪がふつた時、江戸城は櫻田門外で、井伊大老が水戸の浪士に刺し殺された。當時東雄は大阪に居て、直接の關係はなかつたが、その浪士を一人匿まつてやつたといふので、罪になり、遂に大阪で召捕られて江戸へ送られた。唐丸籠といふ窮屈な駕籠に押込められて、東海道五十三次を下つて來た。すると志士ぢや、歌人ぢや、佐久良東雄が通るぞといふので、途々の宿屋などでは、駕籠の傍へ短册などをもつて來ては何か一筆とたのむ。東雄は、よし／＼といつては、歌をかいてやつた。それらの歌の中に、「花の散るを見て」といふ題で

事しあらば、わが大君の大御爲、
人もかくこそ散らまほしけれ。

まつろはぬ　江戸城炎上の事をきいて詠んだ歌

傳馬町　今日本橋區のうち

またこんなのもあつた。

　まつろはぬ奴ことゞゝ束の間に
　　やきほろぼさん天の火もがも。
　おきふしも寐ても覺めても思ひなば、
　　立てし心のとほらざらめや。
　現身の人なる吾や、鳥けもの
　　草木と共に朽ちはつべしや。
　君がため命死ぬべき大丈夫と
　　なりてぞ生けるしるしありける。

又今様歌もある。

　このおほいなる天地の　中にちひさく生れいて、
　千年に殘る名もなくて、　消えゆく人こそはかなけれ。

さて江戸で傳馬町の牢屋に籠められたが、東雄は幕府から惡まれて居る



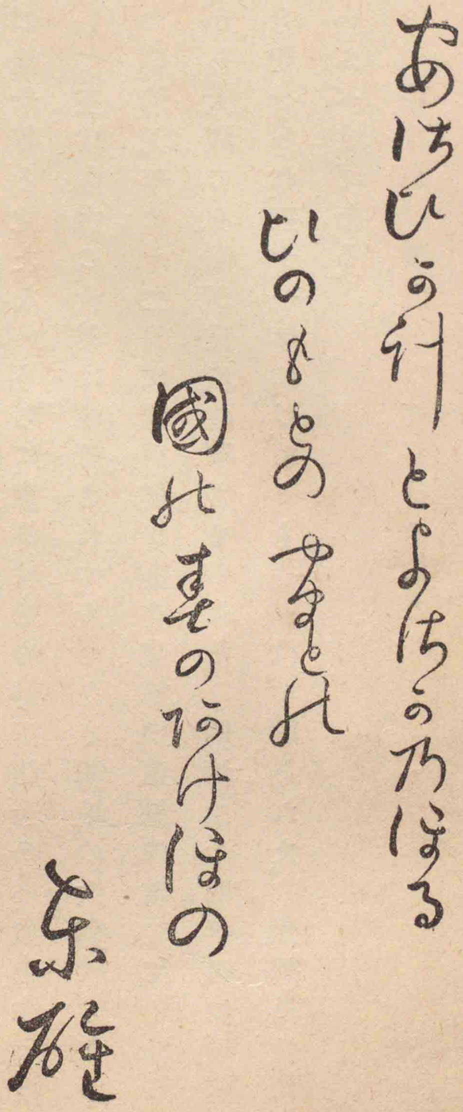
伯夷・叔齊　支那の上古の高士　周の武王が殷の紂王を伐つて天下を取つたので周の粟を食むのはいさぎよくないといつて首陽山に隱棲して薇を採つて食つて居た

水戸侯　徳川慶篤

ので、毒害されるかも知れない、死ぬのは固より覺悟して居るが、そんな死に様をするのは殘念だと思つた。それで食物のかはりに枇杷をくれと牢番に頼んで、毎日々々枇杷の實だけ食べて居た。かの伯夷・叔齊が首陽山の薇を食べたやうに、幕府のものはたべぬといふ心意氣もあつたのである。そのうちに到頭食を絶つて死んで仕舞つた。年は五十であつた。」其の後十年と立たないうちに、東雄はじめ勤王諸士の心血を注いだ結果として王政復古の大業は成就されて、めでたき明治の大御代となつた。その明治元年の十二月に水戸侯が金を東雄の遺族に贈つて千住の小塚原から大阪の夕陽が丘に改葬させられた。明治二十四年には靖國神社に合祀せられ、三十一年には、忝くも從四位を贈られた。聖恩枯骨に及ぶといふべきである。

　朝日かげ豐さかのぼる日の本の
　　やまとの國の春のあけぼの。

―佐久良東雄



佐久良東雄歌碑

といふ東雄の歌は、大日本帝國の今日あることを早くも豫言したやうに思はれる。

佐久良東雄は櫻咲く日本の國の男子の中の男子である。（和歌百話に據る）



## 二　勘ちやん

長谷川二葉亭

長谷川二葉亭　名は長之助　文學者　明治四十二年歿　年四十八

「內ん中の鮑つ貝、外へ出りや蜆つ貝。」と友達に囃されて、私は悔しがつて能く泣いたつけが、併し全く其の通りであつた。

どういふものだか、內ではお祖母さんが舐めるやうにして可愛がつてくれるが、一向嬉しくない、却てうるさくなつて、出るなと留める袖の下を潜つて外へ駈出す。

しかし一歩門外へ出れば、もう浮世の荒い風が吹く。子供の時分のそれは何處にもある苛めつ兒といふ奴だ。私の近處にもそれが居た。勘ちやんと云つて、私より二つ三つ年上で、獅子つ鼻の、色の眞黑な兒だつたが、かういふのに限つて亂暴だ。親仁は郵便局の配達か何かで、大酒呑で、阿母はお引摺と來てゐるから、いつも鍵裂きだらけの着物を着て、踵の切れた冷飯草履を突掛け、片手に貧乏徳利を提げ、子供の癖に尾籠な流行

歌を大聲に歌ひながら、飛んだり跳ねたり曲駈といふのを遣り〳〵使に行く。始終使にばかり行つても居なかつたらうが、私は勘ちやんの事を憶ひ出すと、何故だかいつも其の使に行く姿を目に浮べる。

勘ちやんは、家では何も貰へぬから、人が何か持つてさへゐれば、屹度欲しがつて、率直に「おくんな。」と云ふ。機嫌好く遣れば好し、厭だと頭を振ると、頤を突きだして「いゝよ〳〵。」と云ふ。薄氣味惡くなつて「遣らう。」とするが、もう受取らない。「いゝよ。くれないと云つたね。いゝよ。」とそればかりを反覆して行つて了ふ。何となく氣になるが、子供の事だ、遊にほうけて忘れてゐると何時の間にか勘ちやんが使の歸に、何處かで蛇の死んだのを拾つて來て、そつと後から忍び寄つて、いきなりぴしやりと叩きつける。わつと泣聲揚げてこちらは逃げ出す。其の後姿を勘ちやんは白眼で見送つて、「ざまあ見やがれ。」

私は散々此の勘ちやんに苛められた。初こそくやしがつて武者振りつ





いても見たが、勘ちやんは、喧嘩の名人だ、すぐと足搦掛けて推倒して置いて、馬乘に乘つてびしや〳〵打つ。私にはお祖母さんが附いてるから、内では親にさへ滅多に打たれた事のない頭だ、その大切にせられてゐる頭を勘ちやんは遠慮せずにぴしや〳〵打つ。

一度酷い目に遭つてから、私は勘ちやんがこはくて〳〵ならなくなつた。勘ちやんが側へ來ると、もう私はおど〳〵して、くれと言はない中から、持つてる物を遣り、「勘ちやん、あの賢ちやんがね、お前の事を意地惡だつて言つてたよ。」餘計な事まで告口して、勉めて御機嫌を取つてゐた。かうしてゐれば大抵は無難だが、それでも時々何の理由もなく通りすがりに大切の頭をこつりと打つて行くこともある。（平凡）

# 三 わが少時

大町桂月

大町桂月 名は芳衞 文章家 國文學者 明治二年生

風呂屋も思ふやうに繁昌せざりけん、父は高知の北郊なる秦泉寺村に移れり。 家は山腰に據り、石垣の上に屋根門いかめしく、板塀を繞らせり。附近には唯五六の人家あるのみなり。 所有の山あり、畑あり、其の畑は家より三四町も離れたり。 父は畑を耕作しけるが、肥料を舁ぎゆくに、余は驅り出されて其の前棒となりぬ。 當時余は九歳なりけるが、脊は高かりければ、父の前棒となるに、甚だしき不釣合にはあらざりしやうなり。 されど、肩は痛かりき。 殊に肥料を舁ぐことは不快に堪へざりき。

肥料運搬の役目がすめば、直に鎌を腰にして山に入ることの嬉しさよ。山に入りて、木の實を食ひ、野に出でて大根を生ながら食へり。 秦泉寺小學校に轉學しけるが、風呂敷包さげて學校に通ふよりも、鎌を腰にして山野を荒し廻る方が面白かりき。 人か猿か、身體矯捷、木に上ることが得意なりき。 或時楊梅の木を一山の麓に見出して、する〳〵と上り、紅熟する實を採つては食ひ、採つては食ひ、獨り自ら喜び居りしに、老人夫婦いつしか樹下にあらはれ、「こりや、大きな鳥が居る。」と言はれて、吃驚仰天、飛びおりて駈出す。 老翁追つかけ來りしが、矯捷なる余には、とても追つつくべくもあらざりき。 橋を渡るには必ず欄干を傳ひたりき。 橋の欄干の上を走るくらゐにては、氣がすまず。 幅二寸あるか無しの板塀の上を走りて樂しみたりき。 或時珍しく伯母二人打連れて來訪し、父と座敷に品坐す。この三人が父の同胞の總べてなり。 われ嬉しさに堪へず、一寸頭をさぐるより早く、例によつて板塀の上を走りしに、伯母顧みて、「芳衛がゐくつちよる。」といふ。「ゐくつちよる」は、「嬉しがつて居る」の方言なり。 心の中を言ひ中てられて、氣恥しくなりしが、父に「あちへ行け。」と言はれて、去つて裏の山に上りぬ。 父の同胞三人が閑談せる座敷の天井の眞中に、燕の巣ありて、恰も燕が出たり、入つたりして居りたりき。

余が好んで山に上りしは、たゞ木の實を食ふが爲のみにもあらず。當時根つ木といふ遊戯が流行り居りたりき。根つ木とは、凡そ直徑一寸内外、長さ二尺内外の木の先を尖らせたるものにして、甲、先づ之を手に振りあげて地に打込む、乙、次ぎに打込み、甲の打込みたる根つ木を倒せば、それを取り、倒さゞれば、己れの根つ木は其の儘にして置く、甲は己れの根つ木を引抜きて、乙の根つ木を打倒さんと競爭する一種の遊戯なり。よしや、敵の根つ木が倒れても、己れの根つ木も倒るれば敵の根つ木を取る能はず、己れの根つ木を倒れたるまゝにして置きて敵が打込みて、己れの根つ木が少しにても動けば、敵に取らるゝなり。二人にてする勝負事なるが、敗退にて交代すれば、何人にても出來るなり。その根つ木の材料には、樫・椿など、堅き木がよし。即ち余はその根つ木の材料を得るためにも山に上りしなり。



余はまた置黐をして小鳥を取らん爲にも、山に上りたり。竹を小さく割りて黐を一杯塗りたるものを二つ三つ交叉して、ちよろ〳〵流るゝ溪間の水溜りの上に置く。さすれば、水を飲みに來る小鳥がその黐にからまりて飛ぶ能はざるなり。これは魚を釣るが如く目前に鳥を獲る能はず。今日仕掛け置きて、明日また見に行かざるべからず。斯く數箇所に設けて置けば、二三日の中には、必ず少くとも一羽は取れたり。時には、鳥の細毛のみの附き居ることとあり。そは黐の力が弱かりしなり。見廻る時に、黐をつけかへざるべからず。その黐も、買ひて得たるに非ず。黐の木の皮を取り、之に水を加へて、大石の上にて、小石にて搗きて、自ら製造したりしなり。

余や魯鈍頑冥、殊に人並はづれて惡戯好きなりければ、父に叱られざる日とては殆ど之なく、父の嚴は秋霜の如く、母の慈は春風の如く覺えたりき。土藏の壁に偉大なる蜂の巣あり。父戒めて曰く、「決して壞してはならぬぞ」と。然るに余は物干棒を以て之を打落したり。蜂には螫され、父には

撲たる。所謂泣面に蜂の滑稽を演じたることもありき。惡戯好きなりしかど、もと〳〵お人好しなり。直接に人に對しては惡戯したることとなかりき。口吃りて、對話する能はざりしかど、人に接するを好みたりき。內氣にて小膽なりしが、身體上の危險を冒すことは、可なり大膽なりき。年の割に身體長大にして、腕力にかけては、同年輩の人に引けは取らざりき。晝間、家に居ることは、殆ど稀なり。夏は一日として水に泳がぬ日は無かりき。夏の夜は、村々到る處、蟲送といふことを行へり。即ち列をなして松明をとぼし、十數箇の鉦・太鼓を二人づつにて舁ぎ、後棒のものが打鳴らし、折り〳〵交代して田の間を練りゆくなり。口に唱ふる文句も一定せり。即ち「さいとうべつたうさあねもり、いゝねのむうしやひいしやげた」と唱ふるなり。こは、齋藤別當實盛討死して、稻の蟲が其の屍體より湧き出したりとの傳說に由るなり。この文句を二つに切り、一句每に十づつの打方をなす。鉦と太鼓との大きさは、直徑二尺內外あり。鉦の音



は甲、太鼓の音は乙、甲乙二音相和し、調子一齊にそろひ、山鳴り谷應へて、世にも勇ましく聞ゆ。これ害蟲を震死せしむると共に、田舍の青年・少年の一大娛樂となる。この村にもあれば、かの村にもあり。互に鉦・太鼓の多きを誇り、時には他村の蟲送連中と喧嘩を始むることとあり。余夏は每夜出でて之に加りたりき。土佐は喧嘩早き處なり。もしも喧嘩して泣きでもして歸れば、意氣地なしとて、母に叱らる。女親が一般に皆然り。男親は猶更の事なり。余は間拔けのお人好しなりしかど、外出すれば、少くとも一日に一度は喧嘩せざるを得ざりき。

余が九歲の時は、西南戰爭ありたり。西鄕隆盛は賊ながらも、一般に慕はれたり。其の戰死するや、一般に惜まれたり。余も一般の噂に化せられて、隆盛を欽慕せり。戰爭の繪草紙は、いたく余を刺戟したり。翌年、丸龜の兵士の一隊、高知城下に來りしことあり。余は母の實家に行き居りて其の行列を見物して、面白さに堪へられず。小叔父余に古靴をくれける

が、家に歸りてこれを穿き、樫の木をサーベルの形に削り成して腰にさげ、自ら小兵士になりたるつもりにて、駈けまはりて、獨り喜びたりき。

嫂は長姉と同年なるが、或時、實家へ行くに、余は之に伴はる。稻の實の黄熟したる時なり。嫂、余を戒めて曰く「穀皮が喉に引掛るといかんから、稻をつまみ食ひをしてはならぬぞよ。」と。斯く言ふ嫂とても、まだ娘盛りの年頃なり、我を戒めたる舌の根未だ乾かざるに、自ら抓み食ひして、運惡くも穀皮が喉に引掛り、眼を白黑して大に苦しみ、實家に行きつくより早く醫者へ駈けつけたることもありき。

余が十一歳の時には、父、市内の山田町に移りて、蠟の製造を創めたり。余は南街小學校に轉學す。余は山田町に移りてより毎夜米を搗けり。米を搗くには脚と腰とに力を入れざるべからず。この際、自然に余の脚力が養成せられたるかと思はるゝなり。

この頃、高知には、旗奪といふ運動が流行したりき。紅白二組に分れて、旗



を奪ひあふ。旗とは云ふものゝ、實は繩なり。兩方に巨大なる孟宗竹を樹て、其の頂上に繩を結び付け、一組の半ばは竹を守り、半ばは敵陣に向ふ。敵の抵抗を排して、竹上に登りゆき、繩を解けば、勝利の半ばは我が軍に歸するなり。されど、なほ其の上に繩を我が陣へ投げざるべからず。繩が我が陣まで屆けば、全くの勝となれど、陣遠くして、とても屆かず。繩は多く中央に落つ。茲にて又奪合が始り、擲り合が始り、人の上に人が重なり合ひ、下になりたるものは殆ど呼吸する能はず、奪ひ合ひの結果、我が陣に引張り來れば、茲に始めて我が勝となる。敵陣に引張り行かるれば、勝負なしなり。實に猛烈を極むる運動にて、負傷するぐらゐは普通の事にて、時に死者を出すこともあり。人數が少ければ、竹を一本のみにして、兩陣の中央に立つ。余は大なる旗奪に加るには年なほ幼かりき。少年同士にて、竹一本の旗奪を行ひしに、木登りが得意なりければ、旗を取るにも妙を得たりき。されど、登り上手と目ざされては、敵の妨害我が一身に集り、登

り上手が却て登る能はざるなり。 余は運動好きにて、色々の運動をなしたるが、旗奪の如き痛快なる運動は、未だ他に之を見ざるなり。

冬は紙鳶を颺ぐるが、何よりの樂みなりき。 土佐の紙鳶は四角形なるが。男子を擧げたる家は、必ず大紙鳶を颺ぐる風習ありき。 その紙鳶に數十條の長き紙の尾をつく。 それが半空に雄飛する樣は、如何にも壯觀なり。その紙の尾は取らせんためなり。 少年どもは之を取ることを樂みにす。空中にあるや、小紙鳶を放つて之を取らんと競爭し、將に地に下らんとするや、數十百人が、枝を短く切り殘せる竹をさしあげて之を取らんと競爭す。 二十四枚ばかりのは、大紙鳶としては小なる方なり。 少年の颺ぐるには、六枚が手頃なり。 余はいつも自ら之を作りたり。 子供は風の子、風強き日、紙鳶を半空に放つは、世にも愉快なり。 自製のものが能く颺れば、猶更愉快なり。

山田町に移りても、余の惡戲はなほ止まず。 家に數個の投網あり。 如何



ばかり擴るものか、われこれを地上に試みて見たくて堪へられず。 或時父の留守を伺ひ、密に持ち出して、これを地上に試みたり。 試みたるまゝにて、跡始末せず、土間の一隅に入れ置きしに、父之を見て、余の所爲なるを知り、大に怒れり。 其の網は父自ら苦心して製したるものなるが、余の惡戲のために、朽ちて用を爲さゞるやうになれり。 父怒らざるを得んや。「家に置かぬ、出て行け。」 これ父の宣告なり。 余は泣く／＼母の生家に行きて、一二泊したるが、やうやく詫が叶ひて、歸家するを得たること、今も猶忘るゝ能はず。 思ひ出す毎に冷汗なきを得ざるなり。

父に叱らるゝが恐しさに、余は日中家に在ること稀なり。 たま／＼家にある時は、好んで繪をかけり。 當時は絕えて少年の讀物なかりき。 家に日本百將傳一夕話あり。 全部十二卷、表紙赤く、中に勇ましき武者繪多し。これが余の唯一の讀物なりき。 讀むといふよりも見るといふ方が當れり。 余は常に書中の繪を見て樂しみしなり。 自ら錢をつかひしことは、

幾ど之なし。或時、婢、余を伴ひて歸省せしことあり。適村社の祭禮ありければ、見物に行けとて、余に二錢渡してくれたるが、われ一錢を遣ひ、一錢を餘して歸り來りて之を返しけるに「氣の小さき小坊樣や」とて笑へり。十二歳の春、故鄕を出でて東京に上りぬ。爾來三十餘年、未だ一度も故鄕に歸るを得ず。余の號の桂月は、土佐の有名なる俗謠の「見ませ、見せましよ、うら戸を明けて月の名所は桂濱。」に取りたるものなるが、實はわれ一度も桂濱に遊びたることなし。「見ませ」は御疊瀨に言ひかけたるにて、御疊瀨・浦戸・桂濱、共に皆高知の入口なる內海より外洋へかけて相接せる土地の名なり。

夏の初になる毎に、楊梅の味を思ふ。土佐の如き煖國ならでは生長せざる木なり。其の實腐敗し易し。東京に取寄せんとするも、途中にて腐敗するを如何ともするなし。「お銀がちぎつた大もゝ」とて賣り歩く聲、空しく耳に留る。盜賊用心の爲に、夜、雨戸を鎖すといふことは、東京に上りて、



始めて知りたる所なり。太平の國なりしかな。知らず、高知城下、今なほ然りや否や。

余は幾度か冷汗を流し來りて、茲に淚を墮さゞるを得ず。嗚呼余の上京したる年は、やがて父の病死したる年なり。魯鈍愚昧、殊に惡戲の甚だしかりし余は、いかばかり父の心を惱ましたりけん。子を持つて知る親の恩。われ今や五人の子の親となりて、父の享けし年に近づかんとす。孝行したき時に親なしとは、言ひ得て切なるかな。父の人物・藝能を知るには、われ年あまりに幼かりき。長姉の夫なる人、後年余に語りて曰く、「父君病篤きに臨み『遺言するから來れ』と言ひこさる。何事かと駈けつくれば、唯黑鯛を釣る法を口授せられたるだけなり。こは素人の釣客は固より、專門の漁夫とても知らず。父君の發明に係る所にて、いつも多く釣られたり。人みな羨みて、頻に傳授を乞へども許されず。今や死に臨みて、我にのみ傳授せられたるなり。」と。

東京に上りては、外叔父に養はるゝこととなりぬ。それより十五歳までは叔父の家に生長しけるが、叔父の感化、余に取りては實に偉大なり。後年叔父余に語りて曰く、「煙管一本のおかげにて、汝はよくなれり。」と。われ執拗にして叔父の命を奉ぜざることありしに、父叔激怒して煙管にて余の頭を撲る。煙管爲に折れたり。われ叔父に叱られしは前後唯この一度ありしのみなり。當時叔父は陸軍砲兵少佐なりけるが、古武士の典型とも謂ふべき人なりき。磊落豪壯、口數少くして何となく威嚴あり。細事に拘らず、妄りに怒らず。こせ／＼言はず、ぶつ／＼小言いひたることなし。常に余を戒めて曰く、「男子は決して弱音を吐くべからず。痛くとも痛しといふな、苦しくとも苦しといふな。暑くとも暑しといふな。寒くとも寒しといふな。」と。醉へば必ず余に向つて臑押しを挑み、余の瘠我慢するを見ては喜べり。晩酌の折、「屋根より飛んで見よ。」といふに、われ命に應じて飛びしに、叔父見て喜んで曰く、「汝は軍人になれる。」と。身體上の



竹橋騷動 明治十一年八月二十三日竹橋兵營の近衞下士卒二百餘名で暴動を起した事件 竹橋は東京丸之内にある今も近衞步兵第一第二聯隊のある處

蠻勇叔父に認められて、余は嬉しさに堪へず。「西郷隆盛以後未だ民間より出でて大將となりたるものなし。われ陸軍士官學校に入り、第二の西郷とならん。」と氣張りしは我ながら滑稽千萬なるかな。

竹橋騷動の際、陰謀諸隊に行き渡り居りたり。叔父の隊の下士卒にも之に加れるもの少からず。叔父はその事を擧げんとせし日に之を聞き知り、咄嗟の間、急に行軍の令を下して郊外に出づ。陰謀に加れるもの出し拔かれて如何ともする能はず。叔父の背後に「隊長をやつつけよ。」とさゝやく聲しば／＼聞ゆ。列を離れて叔父に近寄り來るあり。大喝すれば、默して退く。今に殺さるゝか、殺さるゝかと思ひつゝ、終に無事なるを得たり。「幾度も實戰に臨みたるが、この時ばかり危き思したることなし。」とは、げにさもあるべし。叔父が率先して行軍を命じ、他にも之に傚ひしものありて、竹橋騷動は近衞兵一部の暴動に止りたり。「聊か國恩の萬一に酬いたる心地す。」と叔父は余に語りたることとありき。余が十四歳の頃は

千頭 名は淸臣
仙石 名は貢

日露間の風雲急なりき。軍人はみな今日明日にも出征を命ぜらるゝかと待ちかまへたり。「出征の日は、願はくは從卒として我を伴はれよ。」とわれ叔父に乞ひて止まず、叔父終に許諾したりしが、日露戰爭は延びて二十餘年の後に起りたりき。而して叔父は既に世に在らざりき。

十五歳の時余は近視眼となりたるを以て、軍人志望は斷念せざるを得ざりき。大叔は余の蠻勇を認めたれども、余の學才を認めざりき。母の同胞は大叔・小叔の二人のみなるが、郷里にありし頃、小叔余を勵まして曰く、「千頭・仙石、今大學校に在り、汝も大學に入れ。」と。軍人を斷念すると共に大學に入るつもりなりと云へば、大叔笑つて曰く、「若し汝が大學に入ることを得たらば、われ瓢簞にて鼻を括らん。」と。瓢簞にて鼻を括るとは到底出來ざることをいふなり。余をして起たしめたるものは、小叔の言にあらずして大叔の言なりき。（冷汗記）



德富健次郎 號は蘆花 文學者 明治元年生
エルサレム 小亞細亞にあるキリストの聖地

## 四 エルサレムの燕

德富健次郎

エルサレムの燕は全く名物の一つである。エルサレムには鳩も飛べば、雀も飛ぶ。稀に鶴も舞ふ。しかし燕の夥しきに比すべき何物もない。何處から出て來て何處の巢に歸るか知らないが、エルサレムの城上一面蚊の如く群れ、而して燕の如くといふより外に形容のしかたもない散りやう、舞ひやうをする。何の爲にあゝ舞ひ翔るのか。たゞ飛ぶがおもしろく、翔るが喜しくて飛び翔るやうに見える。遠きは蚊頭の一點、近きは白い胸を見せて、ちゝ、ちゝ、ちゝとかけ聲をしつゝ、何萬といふ數知れぬそれが、水色の空から城へ、城から空へ、山から塔へ、塔から山へ、稻妻の如く閃き、礫の如く落ち、夢の如く輕やかに、想の如く速かに、光線と射、音波と搖ぐ。あの夥しい燕が、あんな自由な全速力の飛翔をして、一の衝突もなく、反れ、躱し、綽々として餘裕があるのは全く驚嘆の外はない。（日本から日本へ）

北原白秋 名は隆吉 詩人 歌人 明治十八年

# 五 葉つぱ・里ごころ

北原白秋

## 葉つぱ

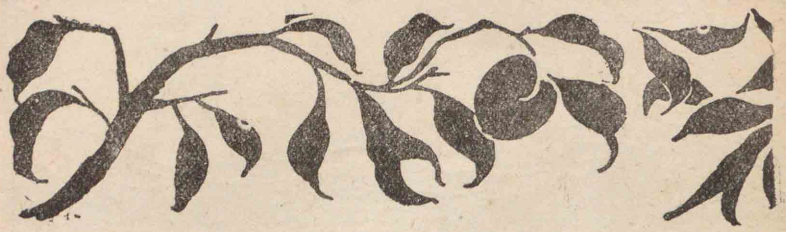
一

杏の葉つぱは杏の香がする。
蜜柑の葉つぱは蜜柑の香がする、
それでも葉つぱは葉つぱつぱ。

煙草の葉つぱも葉つぱつぱ、
山椒の葉つぱも葉つぱつぱ、
それでも葉つぱは葉つぱつぱ。



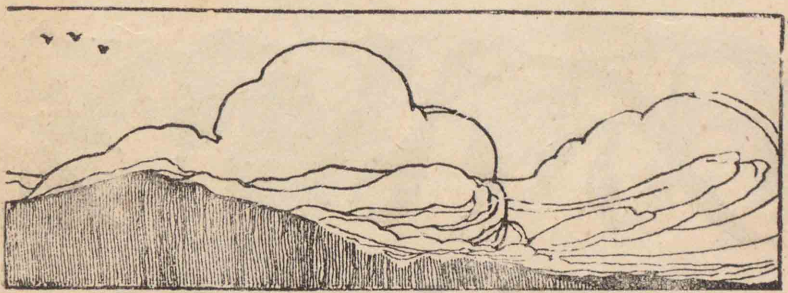




二

いばらの葉つぱにやお針が着いてる、
花の無い葉つぱは花のよに咲いてる、
それでも葉つぱは葉つぱつぱ。

綠の葉つぱも葉つぱつぱ、
眞赤な葉つぱも葉つぱつぱ、
それでも葉つぱは葉つぱつぱ。

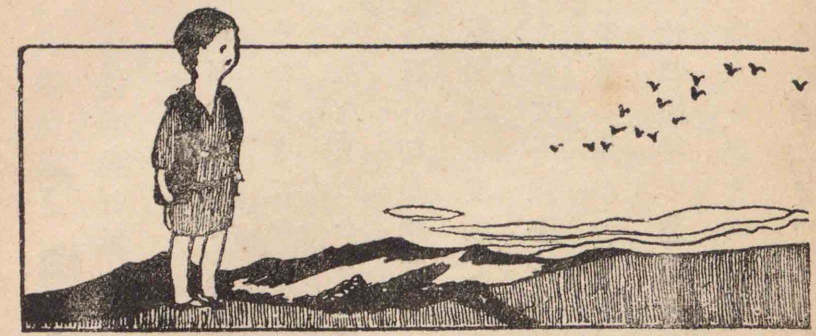


## 里ごころ

笛や太鼓に、
さそはれて、
山の祭に來て見たが、
日暮はいや〳〵、
里戀し、
風吹きや木の葉の音ばかり。
母さま戀しと
泣いたれば、







どうでもねんねよ、お泊りよ。
しく〳〵お背戸に
出て見れば、
空には寒い茜雲。
雁、雁、棹になれ、
前になれ。
お迎ひ、頼むと言うておくれ。

（兎の電報）

# 六 蜘蛛の絲

芥川龍之介

芥川龍之介 文學者 大阪毎日新聞記者 明治二十五年生

## 一

或日のことでございます、お釋迦樣は極樂の蓮池のふちを、一人でぶらぶらお歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、其の眞中にある金色の蘂からは、何とも言へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居りました。極樂は丁度朝でございました。

やがてお釋迦樣は其の池の緣にお佇みになつて、水の面を蔽うてゐる蓮の葉の間から、ふと下の樣子を御覽になりました。此の極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つてをりますから、水晶のやうな水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、まるで覗き眼鏡を見るやうに、はつきりと見えるのでございます。



すると、其の地獄の底に、犍陀多と云ふ男が一人、外の罪人と一緒に蠢いてゐる姿が、お眼に止りました。

この犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろいろ惡事を働いた大泥坊でございますが、それでもたつた一つ、善い事をした覺えがございます。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。

そこで犍陀多は、早速足を擧げて踏み殺さうとしましたが、「いやいや、これも小さいながら命のあるものに違ひない。その命を無闇にとるといふ事は、いくら何でもかはいさうだ。」と、斯う急に思ひ返して、たうとう其の蜘蛛を殺さずに助けてやりました。

お釋迦樣は地獄の樣子を御覽になりながら、此の犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひ出しになりました。さうして、それだけの善い事をした報には、出來るなら、此の男を地獄から救ひ出してやらうとお考へ

になりました。幸ひ側を御覧になりますと翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の絲をかけて居りました。お釋迦樣は、其の蜘蛛の絲をそつとお手にお取りになりました。さうしてそれを、玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の庭へ眞直にお下しなさいました。

## 二

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈んだりしてゐた犍陀多でございます。

何しろどちらを見ても眞暗で、たまに其のくら闇からぼんやり浮き上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、其の心細さと言つたらございません。其の上、あたりは墓の中のやうにしんと靜まり返つて居て、たまに聞えるものと言つては、ただ罪人が吐く微かな溜息ばかりでございます。



これは、此處へ落ちて來る程の人間は、もうさま／＼な地獄の責苦に疲れ果てゝ、泣聲を出す力さへなくなつてゐるのでございました。ですから、流石大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで「死にかゝつた蛙」のやうに、たゞもがいてばかり居りました。

ところが或時の事でございます。何氣なく犍陀多が頭を擧げて血の池の空を眺めますと、其のひつそりとした闇の中を、遠い／＼天の上から、金色の蜘蛛の絲が、まるで「人目にかゝるのを恐れるやうに」、一筋細く光りながらする／＼と自分の上へ垂れて參るではございませんか。犍陀多は之を見ると、思はず手を打つて喜びました。此の絲に縋りついて何處までも上つて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いや、うまく行くと極樂へはひる事さへも出來ませう。さうすれば、針の山へ追ひ上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもある

筈はございません。

から思ひましたから、犍陀多は早速其の蜘蛛の絲を兩手でしつかりと摑みながら一生懸命に上へ〳〵とたぐりのぼり始めました。もとより大泥坊のことですから、斯ういふ事には、昔から慣れ切つて居るのでございます。

併し地獄と極樂との間は、何萬里となく隔つてゐるものですから、いくら焦燥つて見た所で容易に上へは出られません。やゝしばらくのぼる中に、到頭犍陀多もくたびれて、もう一手繰りも上の方へは手繰れなくなつて仕舞ひました。そこで仕方がございませんから、先づ一休み休む積りで、絲の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見おろしました。

すると、一生懸命にのぼつて來た甲斐があつて、さつきまで自分が居た血の池は、今ではもう何時の間にか闇の底に隱れて居りました。それからあのぼんやり光つてゐた恐しい針の山も足の下になつてしまひました。





此の分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも存外譯がないかも知れません。

犍陀多は兩手を蜘蛛の絲にからみながら、此處へ來てから何年にも出した事のない聲で、

「しめた、しめた。」と笑ひました。

ところが、ふと氣がつきますと、蜘蛛の絲の下の方には、數限りもない罪人たちが自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ上へと一心に攀ぢのぼつて來るではございませんか。

犍陀多は之を見ると、驚いたのと恐しいのとで、暫くは唯馬鹿のやうに大きな口を開いた儘、眼ばかり動かして居りました。

自分一人でさへ斷れさうな此の細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へる事が出來ませう。もし萬一、途中で斷れたといたしましたら折角此處までのぼつて來た此の肝心な自分までも、もとの地獄へ

逆落しに落されてしまはなければなりません。そんな事があつたら大變でございます。

が、さう云ふ中にも罪人たちは、何百となく何千となく、眞黑な血の池の底から、うよ／＼と這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を一列になりながらせつせとのぼつて參ります。今の中にどうかしなければ、絲は眞中から二つに斷れて、落ちてしまふに違ひありません。

そこで、犍陀多は大きな聲を出して、

「こら、罪人ども、此の蜘蛛の絲はおれの物だぞ。お前たちは一體誰の許を受けてのぼつて來た。下りろ、下りろ。」と喚きました。

其の途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、急に犍陀多のぶらさがつてゐる處から、ぷつりと音を立てゝ斷れました。ですから犍陀多もたまりません。あつと云ふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくる／＼まはりながら、見る／＼中に、闇の底へまつさかさまに落ちてしまひました。



後には唯極樂の蜘蛛の絲が、きら／＼と細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れて居るばかりでございます。

## 三

お釋迦樣は極樂の蓮池のふちに立つて、この一部始終をじつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶら／＼とお歩きになり始めました。

自分ばかり地獄から拔け出さうとすると、犍陀多の無慈悲な心が、さうして其の心相當な罰を受けて、もとの地獄へ落ちてしまつたが、お釋迦樣のお目から見るとあさましく思しめされたのでございませう。

併し極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着いたしません。其の玉のやうな白い花は、お釋迦樣のおみ足のまはりに、ゆら／＼と蕚を動かし

てをります。其のたんびに、眞中にある金色の蘂からは何とも言へない好い匂が絶間なくあたりに溢れ出ます。

極樂ももうお晝に近くなりました。（夜來の花）

## 七　金剛杖

江見水蔭

七時半に、こゝを出發、それから富士嶽神社に參拜した。こゝの朱塗の大鳥居は、實に見事である。兩柱の間が六間餘、上に「三國第一山」とある。額の筆者は、良恕法親王と傳へてある。こゝで、他が記念印を捺してもらつてゐる間に、余はひとり舞樂殿に上つて金剛杖を、突き立てなどしてゐると、「草鞋で、そこへ上つてはいけません」と、神職から眼玉を喰つた。この失策誰も知らず。

江見水蔭　名は忠功　文學者　明治二年生
こゝ　甲斐國都留郡上吉田　富士登山の北口
富士嶽神社　上吉田の淺間明神
三國　日本・唐・天竺
良恕法親王　後陽成天皇の弟　山城國曼殊院門跡　（二二三三─二三〇三）



社の背後から、鈴が原といふに入つた。雲低く、雨細き草の野原は、景色また格別である。後列から先頭を見ると、一人々々、影が薄れて行く。麗水子よりも、竹風子の姿が薄く、竹風子よりも、金風子がまた薄い。ずつと前の東禹子は、朦朧として、はや見分け難いのである。されば、また、先頭の畫伯が、逆に後列の方を顧みて、寫生帖に余の姿を入れるには、たつた薄墨の一筆に、さら〱と畫いてしまふであらう。

一里にして、中の茶屋に着いた、それが九時。すると、こゝに雨宿りの行者連や、下りの馬子・强力などが、口々に天候不良を說いてゐる。「今日は、大變御山が荒れてゐる。この樣子だと、まづ二三日は登山が出來ない。御山を知らない者は、先へ〱と行きたがるが、かういふ時には、下で待つてゐるに限る、室へ押籠められて、きう〱いつてゐるより、どのくらゐいゝか知れない。」など、山馴れ顏の先達が聞えよがしの高話し。聞きながらして、こゝを出發すると、この邊はもう、だら〱のぼりで、大分平地より高くな

麗水　遲塚金太郎　文章家
竹風　登張信一郎　獨逸文學者
金風　長井行　漢學者
東禹　織田氏　畫家

（特長）
一、描写ノ緻密
一、會話ノ巧妙
一、誇張法の表現

つてゐるので、風は強く絲立の袖を拂ひ、雨は繁く菅笠の廂を打つ。

降りて來る連中は、みな失望の色である。中に汽車で見知の人が居て、自分たちより早く立つたのが、もう歸途に就いてゐる。

「とてもだめですぜ。馬返で警官がとめてゐます。よほど、山は荒れてゐるさうで」など、いひ捨てゝ、せつせと吉田へ降つて行く。

光景暗澹形勢不隱、こんな字を用ひてもいゝやうになつた。

十時三十分に馬返に着いて見ると、こゝの混雜といふものは非常である。白衣の行者、黑衣の學生、三軒の茶店に充滿してゐる。その充滿が混亂を極めてゐる。まるで戰爭だ。それも勝利の方ではない、負けて陣地を引揚げる時の光景だ。

山からは、續々走り降つて來る。みな目的を達せずして、三四合目から引つかへすのである。

こゝに巡査派出所があつて山から電話が懸つて來る。そこで聽いてみると「山上は大暴風雨です。石が、雨といつしよに吹上げられてゐます。五合目から上へは、とても登れません。五合目から下の室は大概滿員です。今、下の分署長からも、電話がかゝりまして、非常に危險ですから、なるべくあなたがたもお歸りなさるやうにといふことで……」と、氣の毒さうに答へられた。



こゝで、同行九人の間に議論が起つた。先達のおどかし、警察の忠告、かう重なつてくると、登山の危險について、つく／＼恐をなして、吉田口へ歸らうといふ說が大分出た。

この軟說主張者が誰々であるかはいふまい。しかし、硬派の面々だけは發表しよう。それは、森山・高見の二氏、それに自分とで、九人の內から、この三人を減ずれば、軟論者の誰々であつたかといふ答案は、すぐ出る筈である。

森山 名は武 寫眞師
高見 名は勝 春陽堂店員

「進むべし。」の一語、澁面作る三人の强力を勵まして、いよ／＼余等は馬返

を發した。 警官たちも行者連も皆無謀に驚いてゐる。

瀧を造る坂道。 盆を覆す豪雨。

ふり向いて見ると、後から麗水子が來る、竹・金・若の三風子も來る、東禹畫伯も太田醫學士も皆續いて來るのである。 さては、前の軟説は笑談にいつたのであつたか。 然り、全く笑談だつたのであらう。 まづ、さうしておく。

（若　鷲山若風 毎日電報寫眞班）（太田醫學士　名は孝之）

馬返から五合目の少し上までは、いはゆる喬木帶である。 その間に立派な新道が通じてゐるので、馬でも樂に行かれるのだ。

だが、吾々は馬を捨て、徒歩で二合目の小室淺間神社まで馳け登つた。 それが十一時四十分。 こゝで、扇子・端書などに記念印を捺してもらつたが、神官らしい人が二三人ゐて、われ〱の強行登山を驚き且危み、「今日はまあおよしなさつた方がよいでせう。」と、とめてくれた。

**好意は謝したが、登山は決して斷念しなかつた。 二合五勺から三合目にと到達した時に、**風強く白雲を切つて、森林の間から僅に裾野をあらはした。「さあどうだ。 天氣はもち直すぞ。」と、余は叫んだ。

今迄の悲觀者は忽ち樂觀者に變つて、「いゝな〱。」の聲は、口を衝いて出た。」正直なる東禹畫伯はわざ〱冠れる笠をとつて、「實はなあ馬返では、あなたが憎らしかつた。 しかし、かう天氣が變つて見ると、吉田へ還らなくつてよかつたですよ。 謝しますよ。 ほんとにあなたはいゝ人だ……」と謝すのか、冷かすのか、分らぬことを口にして喜ばれた。

が、悲觀は忽ち樂觀、樂觀は忽ち悲觀。 霽れるかと見れば、すぐと降り出し、降るかと思へばすぐと晴れる。

**麗水子と太田國手とは、**既に數回の登山をした山通である。 その山通の言によると、その晴雨定まらないのが甚だ好くないといふ大の悲觀說で、なるほど經驗に富んだらしい多數の行者連は、室といふ室にぎつしり詰つてゐて、一人も外に出て居ない。 登つて行くのは、われ〱九人と三人

の强力のみだ。

四合五勺の小屋に達したのは午後一時。こゝからの眺望を貪るに便ならしめる爲に、室の前の木柵に懸札がしてあつて、筑波山・武甲山・川口湖・馬入川・東京・甲府など、その方位を示してあるけれど、雲漠々として、何物をも見ることが出來ない。その懸札の文字さへも、時には淡くうすれる。鼻の先を雲が行くのである。

竹風子、忽ち叫んで曰く、

「小屋の屋根から雲が湧いとるぞ。」

麗水子、これに和して曰く、

「みんなの笠からも雲が湧いてるぜ。」

雲は脚絆からも草鞋からもむれ立つて、直に富嶽の大觀を覆ひつゝある。

一同こゝで名物の水飴を味はつたが、なか〳〵うまかつた。九人の紳士



が子供のするやうに箸の先につけて飴をしやぶる。中には髭を汚して困つたものもあつた。

この間、金風子はしきりに植物を採集してゐるので、誰やら胴籃を覗きこみ。

「これはなんといふ花です。」と問を試みると、金風子は、平然として、

「家へ歸つて、本を見んとわからん。」

五合目に着いたのは二時三十分。まだ日沒までにはよほど登れるのであるが、こゝにも新設せられてある派出所の警官が、八合目よりの電話に照して、到底こゝからの登山、思ひもよらずと說かれたので、殘念ながら一行はこゝに宿することゝした。

なるほど金剛杖一本突き入れる處もない。室といふ室は滿員である。講中も居る團體も居る。田舍者も江戸兒も學生も紳士も行者も强力も

皆緋小屋に緋を積んだやうになつて籠つて居る。其の中へ無理に割り込んだ我々九人が、如何にしてこゝに一夜を明したらうか。（金剛杖）

## 八 難船

相馬御風

相馬御風 名は昌治 文學者 明治十六年生 六月十二日 大正六年

これも矢張先日の暴風浪の時に起つた事件で、場所はあの有名な親不知附近であつた。あの時の俄か荒れは六月十二日の夕方から起つたのであるが、翌十三日の朝九時頃になつて、僕のところから西へ三里ほど離れた親不知東海岸へ乘り上げた五艘の漁船があつた。いづれも越中宮崎村の漁船であつたが、幸ひ乘手は皆生命に別條はなかつた。併し彼等は皆暫くは起つ事が出來ないほどに疲れもし、餓ゑもして居た。



ところが彼等が救助されてから間もなく、またしても一艘の小形漁船がその濱へ漂流して來た。しかし今度のは船が小さいのと、乘手が僅かに二人しかないのと、しかもその二人が既に極度の疲勞に達してゐるらしいとの爲に、とても彼等自身の力で岸近くまで乘り上げる事が不可能であるやうに見えた。それでその附近の村民は大擧してその哀れな漂流船一艘を助けようと集り騷いだけれども、荒れ狂ふ大浪に氣を呑まれてたゞ徒らに騷ぎ廻るだけで誰一人波を潛つて救助に向ふべく奮起し得るものがなかつた。しかも漂流しつゝある二人の漁師の命は刻々に危險に瀕するばかりであつた。

折も折突如として彼等の間へ割り込んで來て、その役目を自分にまかせてくれろと申し出た二人の男があつた。見ると、それはつい數刻前に救ひ上げられた越中の漁師であつた。その二人は年はまだ若く、身體も頗る强健さうに見えたのであるが、何にせよつい今の今まで綿の如く疲れ

て臥て居た人達であつた。人々は一時は喜びはしたもの丶、ひどく危まないでは居られなかつた。しかし二人は云つた、「俺たちはどうせもう死ぬものと覺悟して居た命をかうして助けてもらつたのだから、死んだつもりで飛込んで見よう。漁師は相見互だ。こんな樣子を默つて見て居てはすまん。」そして二人は咄嗟の間に救助船に乘り込んですさまじい怒濤の中へ分け入つた。しかし不幸にもその瞬間かの漂流船は重なり來つた大浪に呑まれて、見る間に姿を沒してしまひ、折角奮ひ起つた二人の苦しい努力もつひに水泡に歸してしまつた。

二人の努力はかくしてつひにその甲斐がなかつた。しかし彼等の示した美しい同情と勇氣とは人々の胸に深い感銘を與へた。「これこそ眞の同情だ。これこそ眞の犧牲的行爲だ。そして其の勇氣と力とは何と云ふ美しさだらう。今にも死にさうにまで疲れ切つて居た體のどこから、それほどの勇氣と力とが出たのだらう。不思議な勇氣だ、不思議な力だ。



多數の疲れない丈夫な人達の中からつひに湧き起らないで、綿のやうに疲れて居た人達の中から突如として湧き起つた其の勇氣と力とは何と云ふ崇嚴な表現だらう。」僕はその話を聞いた時に幾度となくさうした感嘆の聲を繰返さないでは居られなかつた。そして更にさうした感激がやゝ永くつゞいた後で、僕は「その二人の漁師だとて、恐らく平常は一向つまらない人達なのであらう。或はむしろ善くない方の人達でないとも限らない。しかも機會に遭遇すれば突如として彼等の內部からさうした崇嚴な同情と勇氣と力とが湧き上つて來る。それは何某と云ふ固有名詞を持つた特定の人物のものであるよりも、むしろ人間そのもの丶奥底にひそんで居る尊さなのだらう。いづれにしても驚くべき事實だ、崇嚴な事實だ。」こんな事をも思つた。

けれどもかう云つたやうな事實があるからと云つて、僕は漁師等の生活情態そのものが善良なだけ純潔なものだなどと云ふのでは決してない。

むしろ彼等は單純であるだけ、それだけ美しさと同時に醜さをも露骨に示し勝ちである。だが僕は今さうした事について語つてゐるのではない。むしろ今の場合、僕自身としては彼等の如き單純に生きる人達の生活の上に、時あつて表現される善良なもの美しいものゝ感化を能ふかぎり僕自身のたましひに受け容れ得ることをより多く希求して居るのだ。他人の救よりもむしろ自分みづからの救を求めて居る今の僕にとつては、これより外に途がないのだ。

（樹かげ）

## 九　漁師

北原白秋

大海の前に無邪氣な子供たちが遊んでゐる。大きな波が來ると逃げ、波が白く捲返して壞れるとすうと白い泡がぶく／＼白い砂濱をすべりまはるのでまた追ふ。それが面白くて、逃げたり追つかけたりして遊んでゐる。どうかすると、逃げおくれてそのまゝ捲込まれて見えず了ひになることがある。親たちの悲嘆はもとよりであるが、無邪氣な子供の戲であるだけに、思ふと涙がこぼれおちるのである。これ位身に染みることはないが、時とすると分別盛りの大人までも捲込まれて了ふ。

この夏には小田原の濱でも、子供が二人に大人が一人さうした恐しい波の爲に引き込まれて了つた。それを聞いて、ある年とつた漁師の一人が私にかういふ話をした。

「だから危ねえといふんだよ。誰でも大けえ波だと逃げやがる癖に小せえ波だと莫迦にしやがるからいけねえ。第一、波の厚さちふものを見なけりやなんねえだ。つまり波の幅だあね。ほうれ見てゐろよ、あんな大けえ波でも淺え波があるだし、あんな小せえ波でも、ほれあんなに分の厚

い波があるだつぺい。何でもねえやうに見えて、この分の厚い波くれえおつかねえものはねえ。いくら景氣ばかり素晴しくつたつて幅もねえ何もねえ波だと、ずうともざあとも上つて來やしねえから大丈夫だ。だからよ、俺たちはうめえもんだよ、沖から歸つてな、ずつと舟を上げようと思ふてえと、何でも濱近くまで漕いで來て、じつと分の厚い波が來るまで待つてるだあね、やつて來る、それつと乘つかるざ、ざ、ざ、ざ、と一思に上つて了ふ、この呼吸が肝心だよ。みんなはあ、何にも知らねえもんだから、小せえ波だと莫迦にしやがつて、逃げも走りもしねえ。おつかねえこつた。波でも表面（うはつら）ばかり見てちやいけねえ、底の厚さを見なけりや駄目だよ。」

私もそれを聞いて、成程と心からうなづいた。

この裏を行つた話では、波の荒々しく立ち騒ぐ姿を見てこの瀬は淺いと見て容易く渡り了せた人があつた。淺瀬の波はいくら激しく見えても底が淺い。波は立たぬが瀞んだ水ほど恐しいものはない、それは必ず深い、底知れずの淵である。

この裏　太田道灌がそこひなき淵やは騒ぐ山川の淺き瀬にこそ仇波は立てといふ歌によつて淺瀬を見つけて軍を進めた話



ある漁師の一人がまたかういふことを私に話した。

「魚は海でとれるでねえ、山でとれるだ。

そんな莫迦なことがあるかつて、だから陸の奴ら盲目だつてことよ。魚だつて人間だつて、生き物には違ひはねえだ、だからよ人間ばかりが利口だと思ふと大間違だはあ、魚だつて何だつてみんなおんなじよ。陸の奴ら、陸にばかり山があつたり河があつたり野つ原があつたり、自分の世界ばかりが極樂世界だと思つてゐる。海にも山もあるし河もあるしよ、谿底もあれば里もあるだよ。それ知らねえで漁師に魚がとれるか、聞いてくんろ。第一人間だつて高い山のてつぺんでは住はれめえ、魚だつておんなじよ、魚だつて波風の立たねえお里が戀しいだ。だから大概魚の住んでるとこは極つてるだ、深い狹間の中でよ、先祖代々安樂に暮してるだ。だからよ、この村には鯔が住んでゐれば隣村には鰆が住んでる

ちふ風だ、ちやんと住場々々も極つてらあな。それを知んねえでは魚がとれねえ。
ところで、どういふところに深い狭間があるかつてことよ。何でもね陸に高い山があれば、その下の海には深い谿がある、低い小山があれば淺い谿がある。それ知んねぢあだめだよ。いゝかね、だからおれたちは陸の山ばかり見て漕いでくだ、魚とらうと思ふなら海ばかり見てちや何にもとれねえ、山を見てなくちやいけねえ、だから漁師は山を見て魚をとるだ。」
それを聞いて、私も成程と心からうなづいた。するとまた漁師がからからと笑つて、かういふ事を附け加へた。
ところで、あの鰤だがね、あいつばつかしはしやうがねえ、年が年中ほつつきやがつて、何處にどうしてゐるともわかりやしねえ、人間なら、だらしのねえ渡り者だあね。

(洗心雑話)



# 一〇 大地震

九月一日 大正十二年

久米正雄

九月一日は朝から驟雨模様だつたので、今日が恐らく鎌倉の海水浴納めの土曜日だとは思ふものゝ、天氣は天氣だし、大半の友達は歸つた後だし、何だか海へも出る氣がしなかつたので、家で手紙を書いてゐると、突如として此の前代未聞の大地震の最初の搖れは、やつて來た。上下動の傾向で、尻を持上げられるやうに感じたので、いつもの地震とは少し違ふなとは思つたが、そのまゝ鎭るものと思つて、七八秒様子を見てゐると、震動は益激しくなつて、最初に襖が私の方へばた／＼倒れ始めた。それで驚いて其の襖の倒れた方向と筋かひにぱつと庭へ飛びだした。緣側を出る時、足腰がふら／＼して後戻りをするやうな焦慮を覺えたが、我ながら素早く生垣と家との間を飛びぬけて中庭の廣場へ出た。震動が始つてから凡そ一分とは經たなかつたらう。私が戸外へ出たのが、近所でも一番

早かつた。だから家は幸に潰れなかつたが、よし潰れたにしたところで命だけは助つてゐたと思ふ。

私が飛びでるとすぐ第二の激しい震動が來て、目前に立つてゐる貝細工店の文化住宅が二階の海鼠壁を剝落させつゝ傾いたと見る間に、赤い瓦を載せた屋根が街路へがら〱と崩れ落ちた。女中と買物に來てゐた老人とがその下敷になつて、女中は店臺の間に助つて引出されたが、客は一擧に潰された。なほ後で火事跡を掘出して見ると、通行中の老婆が死んでゐたといふ。次いで、その店につながる母屋の住居が餘波を食つて、柱や戸をばら〱にほぐらせながら屋根をその中へ落ちこませた。見ると裏の平家も其の裏の土藏の崩れたのを背負つて、すつかり倒されてしまつてゐた。私はそれらの崩れるのを目前に見ながら、見てゐる中は何故かまだそれほど大した地震とも思つてゐなかつたが、少し震動が止んで、やゝ冷靜に周圍を見廻した時、始めて吃驚した。



それから私はすぐ海嘯を恐れた。これはかうしてはゐられないと思つた。で五分と經たない中に、總べてを放擲して、程遠からぬ長谷觀音の高い境内へ駈けつけた。觀音は大柱が傾いてはゐるが、さすがどつしりと藁屋根を聳えさしてゐた。私はすぐ海を見晴す境内の左手の崖ぎはへ出た。

見ると鎌倉灣内の潮はいつもより二三町も沖までずうつと一面に干上つてゐた。そして岩か海藻かを點々と黑く殘して、そのてら〱と空を映した水溜りのある干潟は、氣味惡く靜まり返つてゐた。それを見た時ほど、凄いやうな氣のしたことはなかつた。どうしたつて、もう大海嘯が來て、鎌倉全土を洗ひ去るに違ひないと思つた。で鐘を撞いて皆に知らせようと思つたが、鐘撞堂は倒潰してゐた。仕方なく私たちは息を吞んで暫く見てゐた。と、やがて豫期したよりはずつと小さいが、土用浪の二三倍はあらうと見える浪が、いつものやうに白く波頭を嚙んでその干潟

を滿し始めた。それでもその浪は坂下・長谷・由井ヶ濱・材木座一帶を襲うて、海岸に沿うた家だけは完全にさらつた。海沿ひの海水浴旅館では、各數人の客と共に家を潰されて出さない間に、その浪にすつかり持つて行かれて、又めちや／＼に打上げられた。後に私たちが見に行つた時は、色色な材木の堆積の上に屋根だけが載つてゐた。

海嘯が來始めた時、私は材木座の方の低地にある知人の家が心配だつたので、長谷觀音の高みから急いで山を下りて其の方へ赴いた。

長谷通りは左側の家々が通りへ面して倒れてゐて、處々屋根を越えたり、狹い軒端の倒れ鼻を摺りぬけたりしなければならなかつた。通りがかりに覗いて見ると、海濱ホテルはやゝ傾いた門柱の中に、傾いてはゐるが、崩れ落ちないで、玄關前の松の間に西洋人たちがうろ／＼してゐた。中には日本ユカタのまゝ山の方へ逃げて行く夫婦などもあつた。

海濱ホテル　由比ヶ濱にあるホテル

人を助けたなどといつても、私はたゞ屋根を少し剝いだのと、その穴から



覗き込んで注意めいた助言を、「あ、その横杆の重みが足に懸つてゐる。」といつた風に、中で救ひ出しに從事してゐる人々に與へてゐたに過ぎなかつたが、それでも赤坊の上へうつぶしになつて胸の下に子供を庇つたまゝ、背中を梁に厭されて出られないでゐた若い母樣が無事に助け出され、それから更にもう一方の棟の下からかすかに洩れる泣聲を便に、やつぱり同じく屋根へ穴を掘つてやうやくその穴の中から三四歲位になる女の兒を、穴の外にゐる私の手へ無事に受取つた時は、世にも嬉しい氣持だつた。その兒はもう救ひ出された極度の緊張で、泣いてなどはゐなかつたが、もう忘れたやうに輝いてゐる日光の中へ出されて目をぱち／＼させながら喘ぐやうに口を動かして、他人の私に抱きとられつゝしがみつきかゝつた。私はその兒の白い洋服の胸が眞赤に染つてゐるので、何か傷でもしたのではないかと、急いで庭の隅の母親が寢てゐる處まで連れて來ると、引剝ぐやうに胸をはだけて見たが、中には何の傷もなくて、赤いの

田中 名は純 文學者

廣津柳浪 名は直人 小說家

は轉げた梅干壺の上へ倒れてゐたものと分つたが、笑ひも出來なかつた。彼らは私が酌んで來た地震の爲に土が落ちこんですつかり濁つてしまつたらしい井戸水を、さもうまさうにごく／＼と飲んで、あまたゝび私に感謝した。

それから小町の田中の處へ行つて見たら、田中の家も平屋建だつた爲か、地盤の爲か、硝子戸一枚毀したゞけで、家の傾さへ割合に少く、一同無事過ぎるほど無事だつた。

けれども近所の廣津柳浪氏は二階家であつたゝめにすぐ倒潰を食つて出る間もなかつたが、幸ひ机か何かの爲に上から落ちた梁が支へられて、身を容れるだけの空隙があつたので、直ちに這ひ出たといつて、同じく下敷にはなつたが、微傷もなく助つた一家の人々と共に田中の家に避難して來てゐた。その外田中の庭へは、近所の海軍將校の家族たちが澤山避難してゐた。田中は僕[illegible]と長谷の方へ出かけたとかで居なかつた。



さうかうしてゐるところへ、田中が齒科醫の寺木君を連れて歸つて來た。夫人が赤坊を抱いて、怒つたやうな顏をして眞先に庭木戸を入つて來たが「久米さん、私、上の子を二人亡くしてしまひましたの。」といつて身體をゆするやうにしながら、涙をはら／＼とこぼした。後から寺木君が悲痛に打挫がれたやうにのつそりと入つて來た。「到頭二人見殺しにしちまつた。親として實に濟まない事をした。久米君。君たちはかういふ際に係累がなくて幸福だよ。」

私は言葉がなかつた。それまでは自分たちに近く、そんなに悲慘事などはないやうに思つてゐたのに、始めて慘害が身に沁みた氣がした。

聞くと、丁度お晝時だつたので、寺木君の子供たちは、臺所で石油焜爐にかけた甘い煮物の出來るのを待つてゐたところへ、ぐら／＼ぴしやつと來たらしい。いち早く飛びでた寺木君が緣側まで出て、赤坊を抱いたまゝうつぶしに身を以て庇つてつゝぷして了つた夫人を──どの母親も同じ

源氏山 鎌倉の北にある山 源義家が奥州征伐の時旗を立てた山といふ
三橋 長谷にある旅館

やうな形で赤坊の上に身を伏せる。―やつと救ひ出した後、子供たちの入つてゐる臺所の屋根をめくつて助け出さうとした時は、もうそこにゐるのは分つてゐるのに、焜爐から出た火が渦を巻き始めてゐた。どうすることも出來なかつた。寺木君は、たゞその火の中へ飛込まうとする狂氣のやうな夫人の帯をしつかと抑へたまゝ傍觀してゐる外なかつた。

大町の火は三四箇所から揚つた。そして私が田中の家から八幡通りへ出た時は、もう停車場側の家々を悉く嘗め盡して、一面の焦土と火焔の中に源氏山が茶色に霞んで見えた。天日は焦けて赤黄色に、たゞ北の空高く鵬のやうにもく〱と盛りあがつてちつとも動かない層雲が氣味悪く半空を蔽うてゐた。

間もなく、長谷の三橋から火が出て、長谷通りは今焼けてゐるといふ知らせを聞いた。三橋といへば私の家のすぐ前である。もう私の家などは迚も駄目だと思つた。それに燃えて惜しいものは人から貰つた手紙だ



けで、外には、かけ換へのないやうなものはないと思つたので、たゞもう残骸を見る氣で、電車線路を歸つて見ると、火は母屋の臺所まで來て、裏の家をも燒き盡してゐるのに、私の家の閾際まで來ながら、魔法の輪でも描いたやうに、そこでひつたり止つてゐた。文字通りに全く火に隣して、しかも焦げてもゐなかつた。けれども火はまだ盛んだつたので、早速私は庭井戸を汲んで水撒きポンプへ水を送るのを手傳ひ、更に又筒口を持つて臺所の火を鎮めた。私の家の荷物は近所にゐた海水浴の友達が運び出してくれて、後には安蓄音機と机しか残つてゐなかつた。

思へば私の小さな借家は全く地震と海嘯と火事の眞中に在つて、その凡てから忘れられたやうに取残されたのである。凡ての災害に隣して、しかも全し。そんな事を言つては多くの罹災者諸君に濟まないが、私は自分ながら今度の震害を受けた人々の中で、最も幸運だつたものゝ一人、最も幸福だつたものゝ一人だと感ぜずに居られない。（中央公論）

## 二 銀座哀唱

西條八十

橋も並木も焼けうせて
夢の銀座となりにけり。
そゞろ佗しくさまよへば、
潰えし甍に秋日照る。

わが兒のために紅き靴
買ひたる店は何處ならん。
燈火明きカフェーに
集ひし人のかげもなく。



夕となりて糠雨の
焦げし歩道をぬらす時、
われはあはれを偲ぶかな、
雪降るころのこの街を。

去年の樂しきクリスマス
その夜のごとく鐘は鳴り、
その夜のごとく樅の樹に
金銀星はかゝるとも。

はた明治屋の店さきに
春待つ子等にうち交り
赤き帽しておどけつゝ

明治屋　銀座の西洋食料品店

サンタクロスの踊るとも。

褥は薄きバラックに
夜半の粉雪のかゝりなば、
疲れてねむる町人の
夢路やいかに寒からん。

荒れし都を傷みつゝ
夕を歩む傘のそと、
汝も淋しき一人かな、
塒燒かれしつばくらめ。
（婦人の友）



## 二三　靜雄の家

田山花袋

田山花袋　名は錄彌　小說家　紀行文家　明治四年生

靜雄の生れた處は、前に沼のある平らな丘のやうな土地でした。靜雄の家の緣側からは、其の沼がよく見えました。朝日がきら〳〵と映つたり、夕日が紅のやうに赤く其の沼を染めたりしました。其處にはずほんの鳥といふのが居て、ずほんずほん――かう其の鳴聲が聞えて來ました。夕方など、其の淋しい鳥の聲を聞くと、靜雄は何時も母の傍に寄添ひました。

ずほんずほん、
ずほんの鳥、
ずほんずほん、
ずほんの鳥。
ずほんの鳥の鳴く時に、

むかし、お城の姫樣が
沼の大蛇(おろち)に見こまれて……。

かういふ唄を誰かゞ歌つて居たのを、靜雄は覺えてゐます。

「あれはね、小さな鳥だとさ。それが嘴を沼の水の中に入れて、そして鳴くもんだから、それであんなに大きく聞えるんだとさ。何も怖いことはないんだよ。」

かう言つて母親は靜雄に聞かせるのが常でした。

靜雄はかなり大きくなる頃まで、其のずほんの鳥の事をいろ〳〵に考へました。「それ、ずほんの鳥が鳴く。」かう言はれると、大抵な惡戲は止めて、よく母親の言ふことを聞きました。靜雄は其の時はもう親一人子一人の淋しい境涯でした。父親は遠い國に行つて、遠い〳〵處で國の爲に勇ましい戰死をして居ました。

「お前一人きりだからね、丈夫でゐておくれよ。ね、お願だから。」



母親はかう言つて靜雄を強く抱きしめました。

垣根の傍だの、畠の道だの、小さなお宮だの、さういふ處で靜雄はよく遊びました。呉蓙を敷いたり、玩具を持つて行つたりして。

併し靜雄の頭には矢張沼が一番はつきりと映つて居ました。きら〳〵する沼、赤い夕日を帶びた沼、暗い淋しい沼、夕立の黑い雲の半分蔽ひかゝつた凄じい沼、西風の立つた朝のくつきりと藍のやうに青かつた沼――。

それが何時も一つ〳〵はつきりと頭に浮んで來ました。

沼のほとりに湯屋があつて、其處へよく母親に連れられて行つたことを靜雄は覺えて居ました。靜雄は其の頃もう七歲か八歲位になつてゐました。そこには額の處に大きな瘤のあるお婆さんがゐて、それがまた優しいお婆さんで、母親といろ〳〵話をするのを、靜雄は傍でよく聞いて居ました。其のお婆さんは蜜柑だのお菓子だのをくれました。或夜のことでした。靜雄は湯屋の戸を明けて外に出ました。ふと見ると沼が金

のやうに美しくきら〱と光つて居ます。 靜雄は子供ながら何とも言はれないやうな心持で、母親が内から出て來る間、じつとそれを見て居ました。

「お丶綺麗なお月樣。」

其處から出た母親も、思はず知らずかう言ひました。

沼が一ところ光つて、金を碎いたやうにちら〱して居ました。 船着の處に繋いである舟も、はつきりと見えました。 空には大きな月が……。

「綺麗だらう、沼が――」

から母親が指して見せました。 靜雄は默つて唯見て居ました。

沼に近い丘の上には、綺麗な雲の見えることが多う御座いました。

靜雄は毎晩緣側の隅の柱に凭りかゝつたり、垣の外に出たりして、その夕方の雲を見るのが好きでした。 何といふ美しい綺麗な空だつたでせう。



赤い〱空に錦の緣を縫つたやうな雲が見えたり、魚の鱗のやうな細かい赤い雲が見えたりしました。 赤い、まるで血の樣な色彩が見るが中に、薄く〱なつて行くかと思ふと、落日の光がぱつと黑い雲にさして後光のやうな金色の光を放つことなどもありました。

「夕燒け小燒け、明日天氣になあれ。」

其の時分はさういふ子供達の聲が彼方此方に聞えてゐました。 靜雄もその群と交つてさう言つて遊んでゐることも御座いました。 しかし靜雄は一人で立つてその夕方の雲を見てゐる方が好きでした。

見てゐますと、赤く染つた雲は段々薄く〱なつて、しまひには家だの樹だの沼だのがその夕燒けの中に黑く見えて、そして段々暗くなつて行つて了ひます。 夕燒けにかゞやいてゐた沼も段々暗くなつて行つてしまふのでした。

「母さん、どうしてあんなに綺麗な雲が出るんでせう。」

靜雄はかう度々母親に尋ねました。

「ほら、母さん御覽なさい、あんな雲が出ましたから。」

かう言つて、母親をわざ〳〵呼んで來ることなども御座いました。

其の頃靜雄の幼い心を惹いたのは、夕方の綺麗な雲ばかりではありませんでした。ざあつと降つて來る雨、終夜がた〳〵と雨戸を鳴らす風、きらきら光る星、細くなつたり丸くなつたりする月——何れ靜雄の好奇心を誘はぬものはありませんでした。

「母さん、どうしてあんな風が吹いて來るんでせう。」

「母さん、どうしてお月さまはあんなに細くなつたり、丸くなつたりするんでせう。」

「母さん、どうしてあんなにきら〳〵する星があるんでせう。」

學校の先生がある時星の話をしてくれました。星はいろ〳〵の種類があつて、地球や月などと同じもので、遠いからあんなに小さく見えるが、そ



ばに行くと矢張非常に大きいものだなどと話してくれました。靜雄はそれから星を見ていろ〳〵なことを考へるやうになりました。

夜母親と寢てゐますと、夜風ががさ〳〵と裏の草藪を渡つて來ました。

　風吹け、な吹け、
　　明日は凧をあげてやろ。
　風吹け、な吹け、
　　明日はさるをあげてやろ。
　坊やが靜かに寢てる間に、
　　坊やがあした起きるまで。

がさ〳〵と萱や篠の動く音は、どんなに靜雄の心を動かしたか知れませんでした。暗い夜の中を、狐か狸より他に通つて行くものもない闇の夜の中に、靜かにかさこそと音を立てゝ通つて行く風の音。「あの風は何處

から來て何處へ行くんだらう。　風の泊つて行く家はあるんだらうか。こんな夜中にさびしくはないだらうか。」こんなことを考へて、靜雄はひとり大きな眼を明いてゐることがありました。

「風は風の神つて言ふのがあつて、風穴から出て來て、風の袋をひろげるので、それであんなに風が吹く。」

どうかすると、母親は靜雄にこんなことを言つて聞かせることが御座いました。　それに其の頃見た繪の本にも風の神が風の袋をひろげてゐるところが書いてあるのを見たことがありました。

「本當か知ら。　母さんの言つた事は本當か知ら。」

樹や草を動かす風を見て、靜雄はじつと立つて考へてゐることなどもありました。

正月――雪の中の正月、それがどんなに靜雄には樂しかつたでせう。　親



一人子一人のさびしい生活でしたけれど、それでも田舍ですから歳の暮には彼方此方の知つてる人が手傳ひに來て、澤山餅をつきました。　そして其の時には母親の姪に當る人だの從弟になる人だのが、その前の夜から來て泊つて行きました。

餅搗の朝はまだ暗い中から、人々が起きて働きました。　昨日磨いで置いた四斗桶の中の餅米の上水は氷つてゐました。　靜雄が提燈のあかりを翳して見せてゐると、母親は片口を持つて來て、「おゝつめたい。」と言ひながら、その氷を碎いて、そして眞白な餅米を蒸籠の中に移しました。　ざくざくといふ冴えた音と眞白なつめたさうな餅米と、それがどんなにはつきりと靜雄の頭に印象されて殘つてゐたでせう。　靜雄は今でもその朝のことを思ひ出しました。

竈の下に燃えてゐる赤い火、三つも四つも重ねて蒸籠の上から白く颺る湯氣、「もう好い、ふけた。」加減を見た母親はかう言つてそれを持つて臼の

中にあけると、待構へた從弟は杵を取つて先づ最初にそれを捏ねはじめる、……姪も待構へてゐておろす杵の調子をはかつて手がへしをする、……杵の音はまだ夜の明けない中から勢よく四邊に聞えるのが常でした。

隣で餅搗、
　お椀持つて駈出せ、
隣で餅搗、
　箸を持つて駈出せ。

こんな唄がありました。家の内は笑ひさゞめく聲で充たされました。

「夜が明けない中に三臼搗いた。」

母親が得意さうにかう言ふのを、靜雄はよく聞くことがありました。

母親はお供へ餅を拵へるのが上手でした。板の上に搗立ての餅を從弟が運んで來る　それに粉をふりかけて、せつせとそれを手で丸めました。お供へ餅の腰が高く出來ると、其の年は運が好いと言ふやうなことがあ



りましたので、母親はいつも一生懸命にそれを丸めました。

「矢張母さんは氣丈者だけあつて、お供へ餅は上手だ、男の拵へたやうなお供へ餅がいつでも出來る。」

從弟は笑ひながら何時もこんなことを言ひました。

井戸の神と竈の神と鎭守と厠と、其の他神棚に上げる小さいお供へ餅が其處等に幾組ともなく出來て、のし餅が三枚も四枚も出來上る頃には、もうお雜煮だの、お汁粉だのが出來てゐました。

霜を帶びた青い柔かい菜の雜煮餅、從弟が沼で打つて毎年のやうに持つて來てくれる鴨の雜煮餅、それを靜雄は大きくなるまで忘れることが出來ませんでした。

鴨と言へば從弟は上手な銃獵者でした。父親の使ひ古した旋條銃をある日母親から貰つて行つて、喜んで鴨や雁や小鳥などを打ちました。ある年大きな雁を一羽持つて來てくれたことを靜雄は覺えてゐます。紫

の嘴をして茶色の羽をひろげた大きな雁。

「丁度これが立つて行くところを蘆ん中にかくれて覘つてゐたんです。どんと放すと、好い鹽梅に當つて、すぐ五六間先のところに落ちた。しめたと思つたが、運惡くそこが蘆の根の薄いところで、ずぶ〳〵足が這入る、まご〳〵すると體まで這入つてしまひさうなので、それは困りましたよ。仕方がないから、蘆を五本も六本も集めて倒してその上を渡つて漸く拾つて來ました。隨分大きいでせう、一貫五百目位はある。」

さも得意さうに從弟は言つて、

「そら靜さん、此處が彈丸の當つたところだ。」

かう言つて羽の下のところを靜雄にひろげて見せました。

靜雄がこの母親の從弟に連れられて、銃獵に行つたのは、もう餘程大きくなつてからですが、兎に角其の頃にはいろ〳〵な水鳥が沼に下りて來たものでした。夕方になると、雁が列をつくつて赤い夕燒けの中を低く鳴



きながら、沼に下りて行くのを、よく見かけました。

靜雄は九歳位の時、この從弟に連れられて一度一緒に行つたことを覺えてゐます。

「そこに靜ちやん待つてお出。」

靜雄のさう言はれたのは、茶畠のやうなところでした。夕燒けがもう微かになつて、日はとつぷりと暮れようとする頃でした。從弟は茶畠を其處から三うねばかり隔つたところに身をかゞませて銃先を上にあげて待つてゐます。其の時も矢張雁だつたと靜雄は覺えてゐます。

ふと夕燒けの暗くなりかけた空に、けろ〳〵といふ聲が聞えて、大きな鳥の羽が映つたと思ふと、すぐずどんといふ音がして、大きな鳥の落ちるけはひがしました。

「ほら御覽、こんな大きな……。」

從弟は得意さうに見せました。

丘の上の正月は靜かな、何方かと言へばさびしい正月でした。門松も大きなのを建てるやうな家はありませんでした。どの家も〳〵小さな枝松を入口に釘で打ちつけて、それに輪注連をかけるばかりでした。それでも國旗はところ〴〵に飜つて、それが晴れた冬の空にくつきりと見えてゐました。

その頃はもう大抵雪が降つて、地上は深い泥濘でした。それでも晴衣を着た娘達は羽子板などを持つて歩いて行きました。晴れた日が續きました。

靜雄が近所の家に歌留多に呼ばれて行くやうになつたのは、それは餘程大きくなつてからのことで、幼い頃は大抵雙六などを出して、近所の子供をつれて來て、炬燵のそばで遊びました。母親は蜜柑だの菓子だの餅だのをくれました。



彌次郎兵衛　喜多八　十返舍一九の著した東海道膝栗毛の中の人物

靜雄はその時分の雙六の繪をよく覺えてゐます。一枚の雙六は御殿女中の生活を畫いたものでした。飛び雙六で、殿樣・若樣・お姫樣・大老・中老・おつぎなどとわけてありました。そして其の人達の日常の言葉がその上にかいてありました。それを母親は讀んできかせて、いろ〳〵御殿の中のことなどを話してくれました。これは餘程昔から家にあつたらしい古い雙六で、裏打が丁寧にしてありました。一枚は廻り雙六で、これは東海道の五十三次が繪になつてゐました。彌次郎兵衛・喜多八の可笑しい滑稽談が一つ〳〵繪になつて居ります。靜雄は子供心に、大人の癖にどうしてそんなことをしたのかと不思議に思ひました。そのころはそれを本當にあつたことゝばかり思つてゐました。上りは京都で、喜多八が長い梯子を擔いでゐるところが畫いてありました。彌次郎兵衛が、百姓のかついだ肥料桶を、鼻を抓みながら棒でかき廻してゐると、後で、喜多八がそれを指して鼻を抓んでゐるところなど、殊に靜雄には可笑しく思は

れました。その雙六は泊りの處が休になつてゐて、其處に行くと一回待つてゐなければなりませんでした。それからもう一枚ありました。それは明治のはじめになつてから出來たものらしく、金時が鉞を持つて熊の子と遊んでゐる繪があつたり、太田道灌に少女が山吹の花を捧げてゐる繪があつたりしました。さうかと思ふと、横濱の西洋人が長い煙管で烟草を吸つてゐるところなどがありました。それから夕顔棚の夕涼だの、頼光の大江山鬼退治などがありました。この雙六は上りが多いので、勝負がすぐつきました。靜雄は炬燵に當りながら母親からその雙六の繪の話をよく聞きました。

十五六日以後は餅に黴が生えて、黄色なところと青い處が出て來ました。具足開きの日に、

「今年のやうに、お供へ餅の固いことはない。早でなければ好いが。」

こんなことを言ひながら、緣側の日當りのよい處に、お供へ餅を持出して、



弓の弦で、母親がこはしてゐることなどがありました。

丘の上の家々は、點々としてゐました。其處に一軒、彼處に一軒、それも樹や林や竹藪などで劃られてゐる家が多う御座いました。古の城のあとであつただけに、處々に土手が出來てゐて、その下の濠には、草が一杯に茂つてゐました。

靜雄の家の裏にも、その小さい土手がありました。その土手の上には、栗だの楢だのが茂つて、草や荊棘が一杯にはびこつて、夏はそれを押分けることも出來ないのですが、冬になると、その土手の下の濠で、氷辷をするために、おのづと、其處に一條の路がつくのでした。靜雄も友達と一緒によく其處に下りて行きました。

氷辷の出來るところは、さう大して廣い場所でもありませんでした。それに草や澤瀉の葉などの凍りついてゐない滑かなところを選ばなければなりませんでした。それでも、長さ三間、幅一間位の滑らかなところは

到る處にありました。日曜日の午前には、其處に多勢の子供等が集つて來ました。

一二月の頃になると、氷は固く厚く張詰めて午後になつても、こはれるやうなおそれがなくなつて行きます。駒下駄では、どうも旨く辷らないなどと言つて、眞竹の太いのを二つに割つて鼻緒をすげて、それで氷辷の下駄をつくりました。

靜雄の家の裏の土手の上からは、沼に面してゐない方の廣い野が一面に遠く見渡されました。

丘の上の士族屋敷は、一方城址に沿ひ、一方沼に沿ひ、一方町に通じ、一方野に連るといふやうな地形になつてゐました。靜雄はよく土手の上に立つて、遠い野の末に連る山々の雪を見る子でした。

遠い山々の雪。それはどんなに美しく朝日夕日に輝いたでせう。廣い野のはてに聳えて遠く〳〵連つた山脈は、幼い心を誘ふに十分な力を持



つてゐました。

幾條にも深く刻まれた山の襞、それに日が斜にさして、雪がきら〳〵と眩いほど美しく光りました。

「綺麗だねえ、母さん。」

から靜雄が言ひますと、

「お前は大きくさへなれば、あの山にでも何にでも登れるんだよ。あの山の澤山ある中で、一番高い山があるだらう。それ、その眞中にある——あれが日光といふ山ですよ。父さんなぞ、其處に在番で行つて、一年も二年もいらしつたことがあるんだよ。それは立派なお宮があつたり、大きな瀧があつたりするんだよ。家に簞笥があるだらう。そら、お前の着物や何かの這入つてゐる、あれが日光から、其の時、父さんが持つて來て下すつた簞笥なんだよ。」

母親は眩く光る山の雪を見ながら、

「お前も大きくなつたら行つて御覽、男だからお前は何處へでも行けるよ。勉强さへすれば、西洋へでも……。女は駄目だけれどねえ……女はさういふ勝手なことは出來ないけれどねえ。」

かう言つて、もう一度、その遠く光る山を見ました。

朝に夕に變つて行く山々の色彩、靜雄は唯それに眼も心も奪はれて了ひました。（小さな嶋）



## 一三 明月の影を二つに割つて

五十嵐力

五十嵐力
文學者
早稻田大學教授
明治七年生

淡青い夕餉の煙がゆるくたなびいて居る。向ふには村長の家の燈火が一つ見える。野掛道を通る馬の嘶く聲も聞える。私は一日の勤勞の貴い汗を洗ひながすために、柿の木の傍に据ゑてある浴槽の蓋を取つて入らうとした。濛々と立ちのぼる湯氣の中に、玉のやうな月影が靜かに憩うてゐた。仰げば十五夜の月は天にかゝつて、我が家をも柿の木をも浴槽をも私の體をも白く照して居る。

私は月の住んでゐる浴槽に入りかねて、暫くそれに見とれて居た。やがて靜かに手を入れると、まん圓な月影が波の爲にさら〳〵と崩れて形がなくなる。暫くして湯の面が平になるにつれて、又もとの玉の姿になる。此の時、私は實に繪にもかけない美感に打たれた。思ひきつて此の明月の影を二つに割つて、月と共に一つ湯に入つた。月は大空に光を放つて笑つてゐる。

白い月の光を浴びながら、靜かに湯の中に冥想して居ると、傍の叢にすだく蟲の音が何とも言へぬ程面白く聞える。體を洗はうとして手拭を動かすと、其の音と共に蟲の奏樂がはたと止む。また靜かに體を湯の中に沈めてゐると、再び涼しい蟲の音が、まるで銀の鈴でも振るかのやうに聞

え出した。私は此の時始めて、

　行水の捨てどころなし、蟲の聲。

といふ句の味を悟つた。

湯上りの膚を涼風に吹かせてから、蓋をしようと思つて近寄ると、平靜にかへつた浴槽の中には、又しても月が玉の樣な清い姿を沈めてゐる。

（作文三十三號）

行水の句　伊丹鬼貫の句



## 一四　名工柿右衞門の村を訪ふ　吉田絃二郎

長崎線の有田驛に下りたのは朝の九時過ぎでありました。そゝり立つた岩山と岩山の懷につゝまれたやうな古い町は、まだ岩山のために日光を遮られてゐるので、何となしに濕つぽい空氣が低い軒のあたりに漂つてゐるやうな感じがしました。

迫つた山と山との間を縫つて狹い川が谿をなして流れてゐます。川床が細かな白い砂であるためかして、一つ／＼の小石でも數へられるほど水は澄んでゐました。黑い岩山の上には、赤松が恰も繪のやうな恰好に矗々と繁つてゐました。

この町を取りかこんでゐる黝ずんだ岩山や松や流れの具合はどう見ても南畫式だと思ひます。京都附近のあの美しい曲線を描いた女性的な山の形が光琳風なのに對して、この附近の山や水はいかにも簡勁な墨繪を聯想させます。　私は有田町の香蘭社に行つて花瓶などを購つてから、香蘭社の人に柿右衞門の家を訊ねました。

「有田町の南の町外れから左に行けば、大村・長崎道になりますから、そつちに曲らないやうに、どこ／＼までも眞直においでなさい。南川原と云ふ山の中のごく小仕掛の家です。」といつて教へてくれた香蘭社の人の言葉を思ひ出しながら、私は有田の町を南の方へ下つて行きました。

柿右衞門　酒井田氏　有田燒で赤い錦出の色を出すことを發明した名人　江戸時代の初期の人

吉田絃二郎　本名は源次郎　文學者　早稻田大學講師　明治十九年生

南畫　支那畫の一派　北畫に對す　我が國で文人畫といふのもほゞ同じ　近世では與謝蕪村渡邊華山などその大家

光琳風　尾形光琳を祖とする畫風

香蘭社　有田燒の輸出品を重に製造する會社の工場

私はまだ中學時代に、この町に一度泊つたことがあつたので、その時泊つた古風な旅籠屋を想ひ出しながら、それらしい家を見て歩きましたが、たうとう探し出すことはできませんでした。　ちよつと寂しいやうな氣もしました。

黒い岩山の懐には段々畑があつて、畑の周圍には櫨紅葉や柿の葉が紅く燃えてゐました。　ゆるい勾配の丘には古い墓地があつて、そこは大抵白い山茶花が咲いてゐました。　町はづれの掛茶屋に腰を卸して南川原へ行く道をたづねました。

丁度收穫の時ですから、店の前には稲こき器械を買つて荷車に積んで行く夫婦の若い百姓が憩うてゐたりしました。　日はかん／＼とまるで夏のやうに烈しく道に照りかへしてゐました。　陶土が白く道の面を埋めてゐますので、ともすれば眩くてたまらないやうなこともありました。



道は右手に岩山の黒髪山を眺めて、西ケ岳だの國見峠だのいふ高い、樹の繁つた山の下を伊萬里の方へ坦々として走つてゐるのでした。　どの田にもどの田にも若い男や女たちが稲をこいたり、連枷で稲を打つたりしてゐました。　空はどこまでも秋らしく澄んでゐました。

私はこの道を小學時代に七八人の友人と夜つぴて伊萬里まで歩いて行つたことがありました。　其の時は霧が一面に山も川の面もつゝんでゐました。　二十三夜ごろの月が光を投げてゐたこともまだ記憶してゐます。　黒髪山を右に見ながら、私は西の方へ白い道を歩いて行きました。

黒く繁つた山の腰には紅葉がちらほらと見えました。

私は柿右衛門が錦彩の色を工夫しながら、秋になればこのあたりの山の色や柿の色をつく／＼と感に打たれて眺めてゐたであらうなどと想ひながら、美しい白い流れに沿うた道を歩いて行きました。

黒髪山には傳説がのこつてゐます。　昔、鎭西八郎がこの附近の豪族の邸

に身を寄せてゐた頃黒髪山の大蛇を射殺したといふことです。その傳說を語つてくれた先生は黒髪山の麓の人でありましたが、先生はその後ハルピンの方へいつて居られるといふことを、去年小學時代の友人たちと始めてクラス會を東京で開いたとき聞きました。

私はその先生のことなどを思ひ浮べながら、埃の多い道を歩いてゐる間に、鐵道線路を踏切つて、なほ伊萬里の方へずん〱歩いてゐました。私は五六歩先に歩いてゐる籠をかついだ女に南川原への道をたづねました。

私は南川原へ行く道を既に可なり遠く通り過ぎてしまつてゐたのでした。

再び鐵道線路まで立ち歸つて、それから南の方へ小さな山道にはひると、そこに古い石の道標があつて、それには南川原道といふ文字がおぼろげに讀まれるのでした。



道は緩勾配をなして低い小山と小山との間を登つて行くのでした。ここにも美しい小川がせゝらぎの音をなして流れてゐました。小川に沿うて草葺の小舍があつて、そこには水車ではないが、小川の水を受けて陶土を搗く仕掛がしてあるのでした。ざあつと水が落ちるたんびに、どしんと小春日和の長閑な感じを喚び起すやうな杵の音が聞えて來るのでした。私はちよつと伊豆の修善寺あたりの山里を聯想しました。恐らく柿右衞門が使つた陶土もこの小川の水で搗かれたのでせう。またこの小川の緣にかれは幾度か呆然として立ちすくんでゐたこともあつたでせう。

どこも畑や家のまはりには丁度赤く熟した柿の實がたわゝになつてゐました。柿右衞門だの澁右衞門だのといふ名が出て來たのもきはめて自然なことのやうに思はれます。

極めて平凡な、小山につゝまれた、極めて平和な感じを抱かせらるゝ山里が、名工柿右衛門の南川原といふ村です。

赤い柿の實につゝまれた秋の村には、二十戸か三十戸ぐらゐの古びた家が爪先上りの道に沿うて一かたまりになつて集つてゐます。家々の前には美しい小川が溝ぐらゐの大きさになつて流れてゐます。大抵は農家だと見えて稻などが土間にも庭にも一面に干してありました。柿の他には或る古い家の庭に美しい石榴が塀の外に枝を垂れてゐるのを見ました。

大抵は同じ家から出たものか、同じ姓の家が幾軒も〱並んでゐました。

「柿右衛門の家は……。」と、私は乳を飲ませてゐた百姓のおかみさんに訊ねました。

「柿右衛門さんの家ですかんた。」と言つて若い女は山の上を指して見せました。



この山里の村の一番高地にある家が柿右衛門の屋敷でした。黒い垣根があつたり、硝子窓の長い、新しい建物が鍵形に並んでゐたりしてゐるのは、ちよつと小學校といふ感じを與へました。

門の突きあたりには昔風の隨分大きな構の家がありました。私はそこにはひつて行つて、主婦らしい三十ばかりの女の人に名刺を出して來意を告げました。廣い土間一面に皿だの鉢だの白い土のまゝの磁器が列べられてゐました。大きな柱も天井も餘程古い時代に建てられたまゝだと見えて黒く煤けてゐました。

若い女は子供を抱いたまゝ私の名刺を握つて門の外に走つて行きました。

私は其の間、庭に出てあたりを見ました。表座敷の右手寄りには倉があつて、倉の前には一本の柿があります。小春日和の日光を浴びた柿の木

には、枝も垂れるくらゐに赤い柿の實がなつてゐました。私は後に聞いたのでしたが、それが柿右衞門と最もゆかりの深い柿の木であつたのでした。柿の木の傍には碑がありました。それには柿右衞門が元和三年豐公の臣高原五郎七に京燒の方法を傳授せられたこと、京燒の質の脆弱なのを不滿に思つて色々な工夫をしたこと、正保三年苦心の後錦彩磁器を發明したことなどが記されてありました。

蛇が多いと見えて碑の下に黑い蛇がのたくつてゐました。碑の前には口を裂かれたまゝの蛇が一匹死んでゐました。間もなく品のよい、若い男が見えましたが、「折角お出で下されましたが、主人が他出中で、何分くはしいことは私には分りませんが。」と言つて工場の方へ案内してくれました。なるほど廣い仕事場のなかはがらんとして、たゞ二三人の男が白い土を捏ねたり、土を入れた水甕を掻きまはしたりしてゐました。

疊を敷いた隅の部屋では、二三人の女が筆を握つて繪を書いてゐました。



そのすぐ傍では蒼い顏色の男が轆轤をまはして壺のやうなものを拵へてゐました。

「あの柿の木の下でお考へになつたさうです、幾年も幾年も。柿の木さへ時が來ればあのやうに色づくのに、どうして人間の力で燒物に赤い色が附けられないだらうかと、そのことばかりお考へになりましたさうで。」と言つて、若い男は仕事場の窓から表座敷の前の柿の木を指さして見せました。

赤く熟した柿の木の實の下に終日默々としてゐた名匠の俤を、私は描いて見ました。私の心には、神の力に對して人間の力を試みようとしたレオナルド、ダ、ヴインチのことが想ひ出されました。

レオナルドダヴインチ　伊太利の天才畫家で彫刻家・建築家（1452—1519）

赤い實のなつて居る柿の木の下には小犬がけだるさうに秋の陽を浴びて眠つてゐました。

私は小さな盃を手に取つて見ました。燃えるやうな朱の色が美しく白

い盃の底に輝いてゐました、　私は庭の土竈と柿の實とを見比べました。私は土竈を開いて、呆然として涙ぐみながら佇んで居た柿右衛門の姿を想像しました。　次の刹那に私は一枚の磁器を抱へて狂喜しつゝ廣い庭のなかを飛びまはつた柿右衛門の姿を想像しました。　その折のかれの喜の聲がそこいらの建物の間にまだ響いてゐるやうにさへ思はるゝのでした。

盃の底に描かれた小さな花の朱の色を見つめてゐる間に、私は涙ぐましいやうな敬虔な心にならずには居られませんでした。

隱れたる山里に苦しみ惱んでゐた恩惠者。　それはたゞ一條の朱の色を磁器の面に刻みつけるだけの發明であつた。　しかしそれはいかにも多くの苦惱を値した仕事でありました。　かれは少くとも私たちの世界に美の要素を一つ多く殖してくれたのでした。

人間の世界の美、人間の世界の幸福はいつでもこのやうな隱れた苦惱者



によりて與へられるといふことを、私は尊い心を抱いて考へずには居れませんでした。

柿右衛門が實際に住んでゐた家は、現在の家の裏でやゝ上手の丘の上にあつたといふことでした。　今では木が一面に繁つてゐます。　その頃は、今の座敷の例の柿の木と松の木との間に土竈があつたといふことです。松もやはり當時からあつたのださうですが、可なり大きな松です。その松の下では鑄掛屋がしきりと鑄掛けをしてゐました。　奥の座敷で茶でも飲んで行つてくれるやうにとしきりに勸められましたが、何分汽車の時間が氣がかりになつて仕方がなかつたものですから、茶も飲まないで歸ることにしました。　柿右衛門の遺物でもあつたら見せて貰はうと思つてゐましたが、時間がないのでそれも果さず歸路につきました。」

柿右衛門の墓は上の山と下の山にあるさうですが、初代の柿右衛門の墓は下の山にあるといふことを聞きましたので、山を下ることにしました。

門を出る時、例の柿の葉があまり美しく紅葉してゐましたので、せめて一枚の葉でもと思つて所望しましたら、家の人は大きな柿の實が二つ附いた枝を手折つてくれました。

門を出てから私は再び同じ道を下つて、蕎麥畑の間を通りながら、村の小娘や畑の中に働いてゐる男たちにたづねて見ましたが、柿右衞門の墓は見當りませんでした。

振りかへつて見ると、北も南もゆるやかな傾斜の秋の小山につゝまれた南川原は、ほんたうに平和な感じをあたへました。　東には高い木の繁つた山が聳えてゐまして。　西の一方だけが開いて、そこからは遙に伊萬里の背後の山が青く煙つてゐるのが見えました。

そこには富豪らしい大きな邸もなく、また貧家らしい小さな家も見えません。　どれもこれも同じくらゐの大きさの農家が平和な谿の懷に黄金



のやうな柿の實につゝまれて怠惰な日向ぼつこをしてゐるやうに思はれました。

學校から歸つて行く子供たちの顔は大抵整つた正しい輪廓を持つてゐました。

私は丘の上の墓場に上つて行きました。　そこには御堂があつて、胸に茜木綿の涎掛を掛けた地藏尊の像が一基立つてゐました。　隣の堂には葬の折に村の人たちが使ふ輿がしまつてありました。

私はしばらくその堂のまはりを探して歩きましたが、酒井田柿右衞門の墓らしい墓はたうとう見出しませんでした。　小さな龕のやうな形の墓があつて、その墓の上や、周圍には眞白な陶土の粉が振りかけられてありましたが、或はそれが名工の墓であつたかも知れません。

ともかく汽車の時間が切迫して來たので、私はそこ〳〵にして墓地の横から粟畑に出ました。　そしてそこに粟を刈つてゐる老人に、今一度柿右

衛門の墓を訊ねて見ましたが、「柿右衛門さんのお墓は上の山にあります。」と言ひました。私はつひに名工の墓を見ずに歸つて來ました。

伊萬里街道に出てから、私は南川原の東の方に聳えてゐる美しい山の名を學校歸りの子供に訊ねて見ました。

「あの山はなんごらんやま」といふやうに聞えましたので「どう書くの。」と訊ねましたが、少年は羞恥みながら笑つて駆けて行つてしまひました。

(麥の丘)



## 一五 綱引

新渡戸稲造

新渡戸稲造 農政學者 農學博士 法學博士 東京帝國大學教授 文久二年生

歐羅巴からの歸り途、船中退屈の餘りに或日綱引をしようぢやないかといふ議が起つた。無論婦人はこれに與らない。唯血氣盛んな男子だけでやることに議が一決した。郵船會社の船で日本人の乘客が多かつたから、組別を一方は日本人、一方は外國人と極めた。尤も外國人とは云ふもの〻過半は英國人。僕は微恙のため御免蒙つて、彌次馬兼行司の役目を勤めた。

愈始める前に兩方十五人づ〻と數はきまつたが、何分外國人は體も大きい、體重を比較すれば日本人は三分の二にも當らないほどだから、到底競爭にはなるまいと思つたが、勝敗は何れにしても只運動が目的だから、やかましいことを云はずに雙方同じ人數で開戰した。すると外國人は、日本人は體が小さいから相手にはならないと思つたか、少し馬鹿にした氣味があつたと見えて第一回は日本人の勝利に歸した。無論、吾々は大いに得意になつて聲を張り上げて喜んだ。次に二回目の勝負を始めると、今度は外國人も油斷しないで引張つたと見えて彼等が勝つた。愈第三回で最終の決戰になると、日本人は大和民族の榮辱此處にありと大奮發

力の有らんかぎり引張ると、外國人遊戯とはいへ、勝負事だから負けず劣らず引張つた。 僕は、その間に立つて氣が氣でなく兩方の形勢をうかがつて、東に走り、西に廻つてひや／＼して居つた處が、あら嬉しや、勝利はわが同胞に歸した。 喜の餘り吾々は飛上つて、聲を揚げるやら手を叩くやらして滿足の意を表した。 相手方は一時茫然として、どうしてあんなちひつぽけな日本人に負けたらうと云ふやうな顔をして考へて居つたが、其の内一人發議して、「おい、彼の日本人は小さい癖に強いぢやないか、公等に勝つとは感心ぢやないか、譽めて遣らう。」と云ふと、皆の者がさうださうだと云はん許りに拍手喝采して、自分等をまかした敵方の勝利を譽めたゝへた。

これをまのあたり見た僕は同胞の勝つのをさも自慢にして、踊り跳ねて祝つたのが、今更恥しくなつた。 如何にも英國紳士の度量は大きい、氣象が高い。 敵だらうが何だらうが、正々堂々と戰つて、己に優る者には之に



服する心掛は、古の武士氣質も斯くやあらんと思はれる。 若しこの綱引に吾々が負けたならば、どうだつたらう。 恐らくは「吾々の體重が少かつたから、競爭上ハンデキャップのないのが公平を缺いて居る。」とか、或は「むかふの人が靴を穿いてゐるから惡い。」とか「船が歪んだが爲に不利の位置を占めた。」とか、何とかかんとか苦情を申込んで屑く負けることを拒みはせんだらうかと、有りもしない詰らない心配を一人でしたことであつた。

（歸雁の蘆）

## 一六 貨幣礫

三浦修吾

西班牙のバルセロナから伊太利のゼノアに向けて出帆した一艘の汽船

三浦修吾　教育家　評論家　大正九歿

バルセロナ　西班牙の東海岸の北部の港　地中海に臨み佛國の西境に近い處

ゼノア　伊太利の西海岸の北寄りの港　地中海に臨み佛國の東境に近い處

があつた。船中には佛蘭西人・伊太利人・西班牙人・瑞西人などが乘つて居た。その中に十一歳になる一人の少年が居た。みすぼらしい身なりをして、野獸の樣に獨り人を離れて打沈んだ眼付で人をじろ〳〵見て居た。彼がこんな眼付をするのも無理の無い事で。今から二年以前に伊太利の田舍に百姓をして居る彼の兩親が彼を輕業師の一行に賣渡した。その一行は彼を撲つやら、蹴るやら、飢じい目にあはすやらして、藝を教へ込み、佛蘭西や西班牙あたりを引張り廻し、始終打擲して食物も十分に與へなかつた。一行がバルセロナに着いた時、彼は虐待と飢餓とに堪へ切れないで、たうとう逃げ出して仕舞ひ、伊太利の領事館に行つて保護を求めた。領事は深く同情して彼をこの汽船に乘せてやり、ゼノアの出納官に宛てた紹介状を渡してくれたのである。そこから無慈悲な兩親の許へ送り歸して貰ふ都合なのだ。少年はあそこゝに傷を受けて居て非常に衰弱して居た。二等室に乘つて居るので、人々が不思議に思つて、彼を



眺めて居た。人が物を言つても返事をしない、すべての人間を惡み厭ふ樣に見えた。かくまでに彼の心はひがんで居たのであつた。三人の乘客が色々と問ひ試みて、やうやく彼の口を開かせた、彼は伊太利語に佛蘭西語と西班牙語との雜つた無器用な言葉で、概略その身の上を物語つた。この三人は伊太利人では無かつたが、彼の言ふことが分つたので、半分は同情からと又半分は酒に醉つて居たからとで、金を少しばかりくれて、猶話をつゞけさせた。その時大勢の婦人達がその室に入つて來て少年の話を聞いて、彼等は人に見えるやうにしていくらか金を出して『これをやらう。』『これもお取り。』と言つて、食卓の上にがら〳〵と投出した。

少年は低い聲で禮を言つて、金を皆ポッケットに入れた。苦み切つた顏の上に始めて嬉しさうな笑みを見せた。それから彼は自分の寢所にはひつて、幕を引いて靜かに横たはつて考に耽つた。此の金があれば、船中

でおいしい物を買つて、二年間も飢ゑて居た腹をこやす事も出來るし、ゼノアに着いたら上着を買つて襤褸を脱ぎ棄てる事も出來る、又金を持つて家に歸れば無一文で歸つたよりは、父母から少しは人間らしい待遇を受ける事も出來るのだ。此の金は彼に取つては一かどの財産であるのだ。彼は寢所の中でこんな事を考へて快い思に耽つて居た。

その時まだかの三人の旅客は二等室の食卓を取卷いてしやべつて居た。彼等は酒を飲みながら旅行中に見た國々の話をして居るのである。話は遂に伊太利の事に及んで、一人は伊太利の宿屋に對して不足をいふ、一人は汽車を攻擊するだん〳〵醉がまはるに連れて、彼等は何もかも惡しざまに言ひ募るやうになつた。伊太利に行くよりか北極にでも行つた方がよいといふ。伊太利には騙詐者や追剝が居るばかりだと云ふ。しまひには、伊太利の役人は字も知らないと言つて罵る。「無智な國民だ。」「乞喰見たいな國だ。」「ぬす……」



一人が今や盜賊と云はうとして言ひも終らない中に、銀貨・銅貨の礫が、雨の樣に彼等の頭の上や肩の上に落ちて來た。そして恐しい音をして、食卓の上に飛んだり、床を轉つたりした。三人の旅客も憤然として起き上ると、又一つかみの銅貨が彼等の顏に打ちつけられた。

「持つてうせろ。」少年は寢所の幕の間から顏を突き出してどなつた。

「おれの國の惡口いふ奴等から、何貰ふかい。」（愛の學校）

## 一七 敵機に同乘して

東露に跋扈跳梁してゐる過激派掃蕩の命を受けた我が派遣軍は、到る處に於て目覺しい活動をして其の任務を果してゐたが、中でも彼我の戰鬪が最も激烈で長時日に亙つて苦鬪したのは、スパスカヤの守備隊であつ

スパスカヤ　露領沿海州の市邑ニコリスクの東北ハンカ湖の東に在る

た。同地は歩兵第十六聯隊が駐屯してゐたが、敵の兵力は我に四五倍し、五日の午前六時から十二日まで全く敵の包圍攻撃を受け、將卒は共に兵營を枕に戰死する覺悟で惡戰した。此の戰鬪に於て後世に傳ふべき幾多の殊勳や戰功の美談が遺された。

五日 大正九年四月

スパスカヤには歐露飛行隊の分隊として立派な飛行場があり、又二十臺近い飛行機及び飛行船の大格納庫もあつた。

尼市 ニコリスク

五日愈我が軍が敵兵の武裝解除を決行するといふ間際に、二臺の飛行機は尼市及び浦潮方向へ飛去つたが、殘りの十五臺は悉く我が有に歸した。飛行將校は何れも歐洲の戰場で鍛へた優秀な技倆を有してゐたが、平生から革命軍に對して好感を持つてゐなかつた爲、隊長以下いざ戰鬪開始といふ段に立ちいたると、忽ち我が軍に投降してしまつた。時恰も守備隊は敵の包圍に陷り、鐵道は勿論、電信・電話も全く不通となり、僅に無線電信で聯絡をつけようとしたが、是亦殆ど不通で、戰鬪の經過に關しては、尼



市に在る旅團とも浦鹽に在る司令部とも聯絡が絶えてしまひ、今ははや孤立無援の窮境に瀕した。しかも敵は愈大擧して我が軍に壓迫を加へようとする情勢になつた。

茲に於て聯隊は、如何にもして一日も早く味方の戰況を尼市の旅團に報告して、聯絡を取らねばならぬことゝなつた。恰も好し鹵獲した飛行機を利用して尼市に飛ばせようとしたが、肝心の飛行將校がない、そこで捕虜の飛行將校から選拔して操縱させ、それに日本軍人を同乘させて飛ばす計畫を立てゝ、聯隊中から募集した處が、吾も〳〵と應募する者が將校からも多數あつたが、詮議の結果、第二中隊の一等卒渡邊七郎が選ばれて名譽の大任を受ける事となり、操縱はアルセニエフ中尉がこれに當ることに決定した。

渡邊一等卒 新潟縣北蒲原郡龜代村大字網代の人

九日午後四時二十分、飛行機は渡邊一等卒を乘せてスパスカヤを離陸し、市街及び兵營の上空を三周し、十五分間にして忽ち三千米の高空に舞上

聯隊長 淺野丈夫

つた。 聯隊長を始め將卒・避難在留民等は、機影を仰いで萬歲を叫び、何れも飛行機が無事に任務を果して彼の地に到着し、援軍の一日も早く來つてこの地の危急を救つてくれることを心に念じた。 機上からも日の丸の旗を打振つて萬歲を答へつゝあつたが、やがて賴もしの影は鐵道線路に沿うてはるか南方の空に消えた。

旅團長 小田切政純

渡邊一等卒は飛行機に同乘するに當つて、聯隊長から戰鬪經過に關する重要書類を旅團長に渡す大任を命ぜられたが、其の際、

「若しも操縦者の故意か又は機體の故障の爲に敵地に着陸した場合には、如何なる處置を執る考か。」

と決心を訊ねられると、彼は卽座に

「萬一敵地に着陸した場合には、直ちに操縦者を射殺し、重要書類を燒棄した後、自殺をします。」

と答へた。 聯隊長は「よし」と微笑して、安んじて此の重任を託されたのであつた。



飛行機は尼市に向つて飛んだが、果して完全に着いたか、或は又途中で着陸したか、翌日直ちに歸來する筈なのが歸つて來ない、折角一縷の希望を繫いでゐた飛行機聯絡も遂に失敗に歸したかと皆々心配した。 翌々十一日となつてもまだ何等の消息もない。 無線電信も依然として要領を得ない。 斯くて其の日も暮れて愈十二日となつた。「今日は歸つて來るだらうか。」と人々は頸を長くして空を仰いでゐると、同日午後三時十分頃、遙に南方の空に當つてプロペラーの音が聞え出し、やがて機上に打振る日の丸の旗も見えたので、

「飛行機が歸つた。」

「渡邊だ〳〵。」

と叫びつゝ、待焦れてゐた將卒は心も空に雀躍りし、萬歲々々と連呼して

歡び迎へた。

飛行機は悠々として降下着陸し、座席から躍り出した渡邊一等卒は大任を果したといふ緊張した態度で聯隊長の前に進み、小田切旅團長からの命令書類を渡し、更に「援軍として派遣された藁谷支隊は九日尼市を出發し、十二日中にスパスカヤに到着の筈である。」といふ福音を齎した。

彼は「敵前に於て殊勳を表はしたる者」といふ兵卒の進級規定に據り、即日聯隊長から上等兵に進級の榮譽を授けられた。

歸途は地上の敵から盛に射撃され、座席や機翼等には幾個も命中したさうだが、併し大切な身體には微傷だも負はず、また機體に些の故障もなかつたのは、天祐といふべきであらう。　飛行中の所感を叩くと、

「私は同乘席に在つて、絶えずピストルの引金に指をかけて居ました。『萬一にも操縦者が變心するやうな事があつたら、撃ち殺すぞ』と脅威しつゝ操縦させました。」



と語つた。

飛行機が新鋭の武器として歐洲戰場に於て幾多の殊勳偉績を樹てたことは、世人周知の事實であるが、鹵獲した敵の飛行機を利用し、而も捕虜たる敵の將校に操縦させ、以て重圍を脱して友軍との聯絡を保つたといふ事は實に飛行界空前の一記錄である。

なほ渡邊一等卒の鄕里に送つた書翰を次に。

大正九年四月五日

前略。　去る五日午前八時より愈革命軍對日本軍の戰鬪始り、沿海州に戰雲動き、其の中我がスパスカヤは最も猛烈に開戰し、半日にして彼等を撃破致候。　しかし其の後我が兵力の少きに乘じ、各地よりの敗殘革命軍が當市に集合し來り、山間に陣地を構成し、吾等を圍み、徐々に日本軍を苦しむる計畫に出で、野砲を以て每日我が軍の兵舍を攻撃し、危險刻々に迫れる故、聯隊長は援軍をニコリスクに求めんとせるも、電信電話は不通となり、何とも致し方なきまゝ、去る五日露西亞軍より鹵獲せ

る飛行機を以て露の飛行將校をして援けをニコリスクに乞はしめんとせしも、兎に角二三日前に俘虜にしたるばかりの將校なれば、祕密命令書を傳達することは、頗る不安心なる故を以て、飛行同乘兵を募集せられ候間、私は第一番に志願して四十里の處を露の將校と共に祕密命令書を持つて飛行し、無事ニコリスクに着陸し、目的を達し候。　援軍も早速スパスカヤに派遣せられ候へば、我が軍は思ひがけぬ援兵に會ひ、定めし意氣の昂ること、存候。　小生本日はニコリスクに泊り、明日スパスカヤに歸るつもり。　歸途にて墜落するか、又は敵に射擊せらるゝか、露將校の心變りて過激派の中に着陸するか致候はゞ、我が生命は無きものに候間、左樣御承知被下度候。　萬一の事これあり候とも、決して御悲歎なし下さるまじく、また無事錦を飾つて歸鄕の節は御喜び被下度候。

四月九日午後十一時　　七郎

兄上樣
姉上樣

（大阪朝日新聞）



夏目漱石　名は金之助　英文學者　小說家　大正五年歿　年、十

## 一八　猫　　夏目漱石

吾輩がこの家へ住みこんだ當時は、主人以外のものには甚だ不人望であつた。どこへ行つても撥ねつけられて、相手にしてくれてがなかつた。如何に珍重されなかつたかは、今日に至る迄名前さへつけてくれないのでわかる。吾輩は仕方がないから出來得る限、吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝、主人が新聞を讀むときは、必ず彼の膝の上に乘る。彼が晝寢をするときは、必ずその背中に乘る。これはあながち

主人が好きといふ譯ではないが、別に構ひ手がなかつたから、已むを得ないのである。その後色々經驗の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は緣側に寢る事とした。しかし一番心持の好いのは、夜に入つて、こゝのうちの子供の寢床へもぐり込んで、一緒に寢ることである。この子供といふのは五つと三つで、夜になると二人が一つ床へはひつて一間に寢る。吾輩はいつでも彼等の中間に己を容るべき餘地を見出して、どうにかかうにか割込むのであるが、運惡く子供の一人が眼を覺すが最後、大變な事になる。殊に小さい方が質が惡い。「猫が來た、猫が來た。」といつて、夜中でも何でも大きな聲で泣きだすのである。すると例の神經胃弱性の主人は必ず眼を覺して、次の部屋から飛びだしてくる。現に先達てなどは物指で尻ぺたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して、彼等を觀察すればする程、彼等は我が儘なものだと斷言せざるを得ない樣になつた。殊に吾輩が時々同衾する子供の如



きに至つては言語道斷である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつつひの中へ押込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら、家內總がかりで追ひまはして迫害を加へる。この間も一寸疊で爪を磨いだら、細君が非常に怒つて、それから容易に座敷に入れない。臺所の板の間で他が顫へて居ても一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向ふの白君などは、逢ふ度毎に、人間程不人情な者はないと言つて居る。白君は先日玉のやうな子猫を四匹産んだのである。ところがそこの家の書生が、三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて、四匹ながら棄てゝ來たさうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を全くして美しい家族的生活をするには、人間と戰つてこれを剿滅せねばならぬといつた。一々尤もの議論と思ふ。

又、隣の三毛君などは、人間が所有權といふことを解して居ないといつて

大いに憤慨して居る。元來我々同族間では目刺の頭でも鰡の臍でも一番先に見附けた者がこれを食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手がこの規約を守らなければ、腕力に訴へてよい位のものだ。然るに彼等人間は毫もこの觀念がないと見えて、我等が見附けた御馳走は、必ず彼等のために掠奪せられるのである。彼等はその强力を賴んで、正當に吾人が食ひ得べき物を奪つて澄まして居る。白君は軍人の家に居り、三毛君は辯護士の主人を持つて居る。吾輩は學者の家に住んで居るだけ、こんな事については、兩君よりも寧ろ樂天である。唯その日〳〵がどうにかかうにか送られゝばよい。いくら人間だつて、さういつ迄も榮える事もあるまい。まあ氣を永く、猫の時節を待つがよからう。（漱石全集）



## 一九　鴨

大谷繞石

大谷繞石 名は正信 英文學者 第四高等學校敎授 明治八年生

主人は川を前の片側町を自分の宅の方へと、二重廻の立てた襟の中へ首を竦めて、片減の足駄あぶなげに泥濘道を辿る。

散歩は嫌、そして子供が無いのでその相手をする煩も樂みも無い主人はいつも書齋に閉籠つて居る。そして何か讀むか書くかして居る。だが折角の休暇だ、しかも暮の二十九日だ、半日や一日机と絶縁して休暇氣分に浸るも面白からう、夏以來打たぬへぼ碁でも打つて遊ばう。斯う思つた主人は晝飯を濟ますなり、折目の見えなくなつた小倉袴を穿いて同じ川沿町の川下に住む、親しくして居る、畫伯を訪ねたのであつた。

絹を張つた枠が三つも壁に立て掛けてあつた。大晦日迄に描き上げなければならぬものらしい。碁打たうかと誘ふとよからうと應ずる。主人は幾年の昔、倫敦は日本協會の演壇で、燕尾服鹿爪らしく着用して、K學

士と共に圍碁を實演し說明して滿場の紳士・淑女の喝采を受け、日本の碁の名人として新聞に肖像を載せられまでしたことは嘗て中央公論紙上で吹聽に及んだ。だが實は頗るのへぼである。大概三十分で片が付くのでも知れる。主人は畫伯に先で向ふのだから畫伯の手並も察しられる。畫債のある畫伯には氣の毒だつたが、お蔭で大いに休暇氣分になつた。暗くなりさうだからと冷えた茶をぐいと飲乾して踞坐から起上つたのは四時頃でもあつたらうか。

宅〔金澤市川岸町八番地〕から一町餘の處まで來て、足許を見て居る眼をふと上げて前方を眺めると宅の前あたりで丈の高い角帽洋服姿の男が川緣に立つて、鳥の毛を捲つて居る。誰だらうかと考へる。Tのやうだ。こちら向いて齒を出して笑つて居る。

「何してるんだい。」

と近寄つて見ると鴨の毛を捲つて居るのである。



「先生、これ持つて來ましたから、今夜御飯の御馳走になります。」

「よろしい。家内は内に居たかい。いつ歸つたの。」

「奧さんはお出です。一昨日歸りました。Kも來て居ます。」

「そりや好かつた。家内は僕の留守にも能く錠おろして出るからね。」

玄關を上る時、臺所の障子が開いて居て井戸水を汲上げる音がするので、見て見るとKがこれまた襟にMの字の大學の制服で芹を洗つて居るのであつた。

「や、御免下さい。今御挨拶にそちらへ參ります。」

と、主人に對して自分が主人のやうな挨拶をする。家内はと見ると茶の間で何か煮物しながら膳拵をして居つた。

「生憎果物を切らしてますから買つて來て下さい。それから蟹があつたら一匹。」

との細君の要求に、歸つたばかりの主人は買物風呂敷二枚持つて外へ出

る。 魚屋へ行つて見たら、幸ひ蟹はあつた。 章魚もあつたから、蟹と酢章魚を持つて來るやう命じ、特製黒つくりといふびらが干物屋に下つてゐるのを見付けて自分の酒の肴の一品にと、二人は落花生が好きだからそれ五合と、林檎五つと、包を兩手に歸ると、臺所ははやランプを點けて居て、洋服の二人は頻と俎板に音を立てゝ居る。

「自分で料理が出來るかい。」

「出來るかいは情無い。 解剖は四高でも教はりましたよ、先生。」

包物を細君へ渡して置いて主人は書齋へ入る。 今日の東京新聞と不在中に屆いた手紙とを披いて讀む。

「そんな汚い七輪は。」

「いえ、構ひません。 長火鉢の火を少し取りますよ。 それから此の炭取を持つて行きますよ。」

なんて聲がきこえる。 すき鍋にする積りらしい。 やがて



「先生、御座敷へいらしつて下さい。」

といふから、主人は、煙草と煙管とを手にして、書物の置場になつてる次の間を通つて座敷へ入ると、誰が點けたかランプも明るくともつて居り、七輪の火もかん〱おこつて居る。 そして二つの唐金火鉢に火もついである。

「お燗が出來たら持つといで。」

と呼ばはつて自分の箸の置いてある膳に坐つた主人は、火氣の所爲で書齋よりか遙か暖いと思つた。 が、それよりも舊生徒T、K二人の主人に對する心を尙暖いと思つた。 そしてその夜は午後からの休暇氣分を繼續して氣持よく醉つた。

鴨は無論旨かつた。 (北の國より)

# 二〇 花咲爺

武者小路實篤

武者小路實篤 文學者 明治十八年生

## 一

（正兵衛日當りのよい處に蓆を敷いて草鞋を作つてゐる。隣村の中兵衛登場）

中　お爺さん相變らずおせいが出ますね。

正　なに、少し足を痛めたので野らに行けないから、草鞋を作つてゐます。

中　お前さんの處の犬は殺されたさうですね。

正　餘り大きい聲を出さないで下さい。聞えるといけませんから。

中　お前さんはそれで慾兵衛さんには何にも言はずに泣寢入をなさつたさうですね。

正　それでも、怒つても始りませんからね。怒つて犬が蘇つてくれるなら怒りもしたでせうがね。

中　だけど默つてゐるのは馬鹿げてゐるぢやありませんか。皆、お前さんが慾兵衛さんを怖がつてゐるから、慾兵衛さんがいゝ氣になるのだと言つてゐましたよ。



正　それでも怒つても始りませんよ。私も若い中は怒りつぽい人間でしたが、この頃になつて、怒るといふ事はよくない事だと氣が附きましたよ。怒つてろくな事はありませんからね。

中　しかし私は話を聞いただけでも腹が立ちましたよ。

正　それはまだお若いからです。私が怒れば慾兵衛さんを怒らす許ですよ。隣同士怒り合つてゐるのは面白くありませんからね。

中　それはさうですが、よく怒らないでゐられますね。犬はどうしました。

正　あの木の下に埋めてやりましたよ。

中　さうですか。本當にいゝ犬でしたがね。あんな犬は二度と見つかりませんね。

正　さうですよ。しかし仕方がありませんよ。婆さんを喪つた時も、取返しがつかない苦みは十分味ひましたよ。この世に居る間は、どんな事が起るかわかりません。出來てしまつた事はそれまでとして、又新しい事を始めて見るより外に、仕方がありませんね。私は今はあの木の大きくなるのを待つてゐます。

中　隨分氣の長い話ですね。

正　經つて見ればぢきですよ。それ迄に死ねばそれ迄ですがね。

中　隣の慾兵衞さんに對して、貴方は本當に腹が立ちませんでしたか。

正　腹が立つよりは犬が氣の毒でした。殺される時どんな氣がしたらう。私が助けに來て欲しいとどんなに思つたらう、その時行つてやればどんなに喜んだらうと思ふと、氣の毒な氣がしますよ。しかしどうも仕方がありません。私は生きてゐる間、何かこの世にお役に立つ事**をしたいと思ひます。思つても始らない事を思つてばかりゐても始りませんからね**



中　貴方はどうしてそんな氣になれるでせう。

正　年の功ですよ。

中　隣の慾兵衞さんだつて隨分いゝ年をしてゐるぢやありませんか。

正　私と同い年ですよ。あの人は苦勞が足りませんから。それに生れつきも手傳つてゐるのですね。あの人は昔から負嫌ひですから。

中　負嫌ひと言ふより、あんな人は慾ばかりの我利々々と言ふ方が本當でせう。

正　人の事ばかり言ふものぢやありません。自分さへ愼んでゐればいゝのですよ。人の事はかまつてはゐられません。

中　貴方は隨分お隣にひどい目に逢はされて來たでせうね。それなのによく懲りずに又犬をお貸しになりましたね。ひどい目に逢ふ事はわかつてゐたのでせう。

正　まあ、半分わかつてゐましたが、殺されると迄は思ひませんでしたよ。

中　貴方はあんまり人を信用なさるから、いけないのですよ。もう懲りてもいゝ時分ぢやありませんか。

正　しかしそれが私の病氣なのですね。自惚が強すぎるかも知れませんよ。つい自分の方で惡い事をしないといふ自惚があると人を信用したくなるものですからね。徳が足りないくせに自分の徳に自惚れるのがよくないのですね。しかし是も修業ですよ。お蔭で少しづゝ修業を積んで行きますよ。

中　貴方が餘り怒らないので、慾兵衞さんは村の同情が貴方にばかり集ると言つて、貴方の事を僞善者だと言つてゐますよ。

正　さう思はれてゐる間は思はれてゐるより仕方がありませんよ。併しさう思はれても私は別に損はしないですみますよ。只さう思ふ事で年中私に心を許す事が出來ず、私を憎まなければならないのは、慾兵



衞さんの損ですが、それも仕方がありません。だから、私は慾兵衞さんより貧乏ですが、慾兵衞さんより暢氣に暮してゐます。いろ〳〵の樂しい事を考へる事が出來ますからね。何でも心の持ちやうだと言ひますが、私も年をとつてから始めてそれが本當にわかりました。うまい事があつても油斷は出來ませんし、悲しい事があつても參つてはゐられません。

中　一寸見てゐない中にあの木は大きくなつたやうですね。

正　あの木は不思議な木ですよ。私がいゝ心持を持つとあの木が大きくなります。あの木は私の心を吸つて生きてゐるやうな氣がします。少しでも考へてはいけない事を考へると、あの木は萎れてしまひます。

中　本當に不思議な木ですね。

正　不思議な木です。併し私にとつてはいゝ木です。恐しい木です。私はあの木を見て自分の心掛を直してゐるのです。慾兵衞さんに不

快を持つとあの木は喜びませんよ。私はあの木が大きくなつたら、臼を作らうと思つてゐます。それで餅を搗いて皆さんに御馳走したいと思つてゐます。その時は貴方も來て下さい。

(木めき〳〵と大きくなる)

中　あつ、木が大きくなりましたね。

正　え丶、皆に御馳走しようと思ふと、この木は喜ぶのです。

中　不思議な木ですね。

## 二

中　たうとう臼が出來ましたね。

正　出來ました。これから餅を搗く處です。

中　手傳ひませうか。

正　有り難う。それなら手傳つて貰ひませう。私が疲れたら代つて下さい。



中　え丶、何時でも代ります。

(正兵衛餅を搗出す。中兵衛隣で見て居る。暫くすると急に餅が寶物に變る。二人は驚く)

中　どうしたのです。

正　(手に取つて見) 餅が寶物に變りました。どうしたのです。

中　えつ、寶物に變りましたか。どうしたのでせう。

正　私にもわかりません。併し誰かゞ私の心に感じて、餅を寶物にしてくれたのでせう。私にもわかりませんが。

中　不思議な事もあればあるものですね。もつと餅を持つて來て搗いて御覧なさい。

正　私はもう怖くなりました。もうこの臼に觸るのが怖くなりました。今度搗いて見たら餅がどうなるか私にはわかりませんから。

(慾兵衛入つて來る)

慾　正兵衛さん、立派な臼が出來ましたね。

正　やつと作りましたよ。

慾　澤山の寶物が這入つてゐますね。どうしたのです。

正　今餅を搗いたら、それがなくなつて、何處からかこんなものがわき出たのです。

慾　えつ、餅を搗いたら餅が寶物になつたのですか。

正　まあ、さうです。

慾　私にこの臼を貸してくれませんか。

中　慾兵衛さん、正兵衛さんはこれからまだ澤山餅を搗かなければならないのですよ。

慾　正兵衛さん、貴方は急ぐのですか。

正　いゝえ、別に急ぎません。

慾　それならこれを貸して下さい。すぐお返しします。私は少し急ぎますから。



中　慾兵衛さん、それはあんまり蟲がよすぎますよ。

慾　何が蟲がいゝのです。いらないものを貸してくれと言ふのが蟲がいゝのですか。

中　貴方は、又餅を搗いて寶物に變へようと思ふのでせう。併しそれはよした方がいゝかも知れませんよ。心の持方一つですから。

慾　寶物がほしくて貸してくれと言ふのぢやありませんよ。只こなひだから餅を搗きたいと思つてゐたのです。

中　貴方は臼を持つていらつしやらないのですか。

慾　持つてはゐますが、あんまり古くなつたので工合が惡くなつて搗きにくいのですよ。正兵衛さん借りて行つていゝでせう。

正　どうか。しかしこの臼は心の持方一つで黄金の代りに穢い物が出る事もありますから、用心なさつて下さい。

慾　私はそんなに心の下等なものに見えますかね。正兵衛さんに比べ

るとそれは誰でも皆下等でせうがね。それなら拜借して行きますよ。

正　どうか。（寶物を取除き）それなら臼を二人で持つて行きませう。

慾　よろしい。一人で擔いで行きますから。

正　杵もお貸ししませうか。

慾　それは私の家にもあります。それならすぐ後でお返しします。（臼に繩をかけ）やつこらさ。

（慾兵衛臼を背負つて退場）

正　隨分慾兵衛さんは力がありますね。

中　慾の力ですよ。ですけど、貴方はよくあんな大事な品を平氣でお貸しになりますね。

正　臼は死ぬ事はありませんからね。併しうまく寶物が出ればいゝと思ひますがね。この前の犬の時のやうに、何も出なかつたら、慾兵衛さんは嘸立腹なさるだらうと、それが氣になりますよ。私だから寶物が



出ると言ふと少し傲慢に聞えるかも知れませんがね。誰でもあの臼で餅を搗くと餅がおのづと寶物になると定まつてはゐないやうに思ひますから。誰でもお米をいたゞけば善人になるとは限りませんからね。私はあの木を心から愛してゐましたから、木の方でも私にでなければ見せないものを持つてゐるやうな氣がします。餘り大きな事は言へませんがね。今時分、餅がどん／＼寶物に變つてゐるかも知れませんがね。慾兵衛さんはふだんの心掛といふ事をまるで考へてゐませんから、少し心配です。

中　私は慾兵衛の餅が寶物に變つてくれなければいゝと思ひますよ。

正　そんな心はなるべく持たないやうにする方が宜しいよ。さういふ心のある間は、大事な事に目がつかなくなりますよ。他人を呪ふやうな事はなるべくしない方が宜しいよ。

中　併しあんまり慾の深いものに罰が當らないのは氣持の悪いもので

すからね。今にひどい目に逢ふといゝと思ひますよ。私はまだ若いせゐか、慾ばり者はひどい目に逢ふ方が氣持が宜しい。何だか餅を搗いてゐる音がしますね。一寸見て來ませう。

(二人耳を澄ませる)

正　もうぢき返しに來ますよ。呪ひながら見るのはよくありませんよ。

中　何だか大きい音がしましたね。臼を倒したやうですね。何か怒つてゐるやうですよ。(間) 何か割つてゐるやうですよ。若しかしたら。

正　大丈夫ですよ。さう人を疑ふものではありませんよ。

中　貴方はよくさう平氣でゐられますね。

正　私は心を出來るだけよくするやうにしてゐます。さうすれば、何かが惡い目に逢はさないやうに私を守つてくれるやうな氣がしますよ。私は自分の心以外の事はなるやうにさせておきます。

中　私は氣になりますから見て來ます。



正　さうですか。併し慾兵衛さんがどんな事をしてゐても、貴方は怒つてはいけませんよ。私の事を思つて下さるなら。

中　大丈夫です。慾兵衛さんと喧嘩しても始りませんからね。

(中兵衛退場。正兵衛耳を澄ませる)

## 三

(慾兵衛飯をたいてゐる。中兵衛登場)

中　慾兵衛さん。

慾　(怒つてゐる) 何か用かね。

中　餅はどうしました。寶物になりましたか。

慾　なるわけはないよ。また正兵衛の野郎にだまされたよ。私は人がいゝもので、すぐだまされるよ。

中　どうしたのです。餅を搗くのはやめたのですか。

慾　搗けるだけ搗いて見たさ。すると何が出たと思ひなさる。

中　何も出なかつたのですか。

慾　出たことは出たよ。正兵衞に敵を討たれたよ。あいつにまただまされたのだ。

中　何を怒つてゐるのです。正兵衞さんは何も悪い事はしないぢやありませんか。

慾　あいつは恐しい悪黨だよ。お前さんもだまされなさるなよ。餅を搗いて寶物が出るやうに見せたのは、私の餅を蛆にする策略だつたのだよ。寶物をそつと入れておいて、寶物が出た、寶物が出た、天から授つたと言つて、あれは人をだますのだよ。

中　そんな事はないでせう。私はちやんとこの目で見てゐたのですから。

慾　それはお前さんがだまされたのさ。あいつは魔法遣見たやうな奴だよ。お前さんをだます位何でもないよ。このいゝ年をした俺でさ



へだまされるのだからね。

中　貴方の餅は蛆になつたのですか。

慾　さうよ。人を馬鹿にしてゐるぢやないか。

中　恐しい目に逢ひましたね。

慾　逢はされたよ。そして何か苦情を言ふと、お前さんの心掛がよくないからと又お説教を聞かされるのだから堪らないよ。そして世間の奴まで俺を馬鹿にして、正兵衞ばかり賞めるのだからね。うつかり苦情も言へないよ。大事な餅を損して泣寝入さ。あいつは本當に恐しい奴だよ。

中　それで臼はどうしました。

慾　臼か。臼は、あんまり人を馬鹿にするから毀して今焼いてゐる處さ。

中　臼を毀したのですか。

慾　だつて毀さないわけには行かないぢやないか。いくらお人好しの

私だつて默つてゐるわけには行かないよ。

中 それだつて、默つて毀すのはよくありませんね。あんなに正兵衞さんが丹精して作つたのぢやありませんか。

慾 その丹精は犬の敵を討つて私に恥をかゝせる爲にさ。私が臼を借りに行つた時、いやな顏一つしなかつたのは、どんなたくらみがあるからだよ。後で舌でも出してゐだらうよ。

中 そんな事はありませんよ。貴方の心がひねくれすぎてゐるのですよ。

慾 何だと。もう一遍言つて見ろ。

中 何度でも言ひますよ。つまり貴方が慾が深すぎるからいけないのですよ。

慾 貴樣は正兵衞に賴まれて、俺の惡口を言ひに來たのだな。喧嘩を賣りに來たのだな。いくら年をとつたつて貴樣には負けないぞ。



中 慾兵衞さん。さう怒るものぢやありませんよ。

慾 正兵衞そつくりだ。怒るものぢやありませんよ。人を怒らしておいて怒るものぢやありませんよもないものだ。

中 何だと。

（二人取つ組あふ。慾兵衞押へ附けられる。正兵衞登場）

正 貴方達は何してゐるのです。さあ、喧嘩などは早くおやめなさい。

慾 正兵衞。覺えてゐろ。貴樣はよくもこの俺をだましたな。

正 何を言つてゐるのです。慾兵衞さん。中兵衞さん。もうおよしなさい。（無理に起す）

慾 正兵衞。よくもこの慾兵衞をだましたな。（正兵衞の顏を打つ）

中 （又打たうとするのを止め）正兵衞さんを打つと承知しないぞ。正兵衞さん、大變な事が出來ましたよ。

正 どうしたのです。

中　貴方が丹精してつくつた臼は慾兵衛さんに燒かれてしまひましたよ。

正　燒かれた。（びつくりして、又平靜に戻る）

慾　燒いたが惡いか。人の餅を蛆にしやがつて。さあ、餅を返してくれ。

中　慾兵衛、そんなわからない事を言ふと承知しないぞ。

正　慾兵衛さん、餅が蛆になつたのですか。それは本當ですか。

慾　しらばつくれるない。お前さんこそよく知つてゐる筈だ。

正　それはお氣の毒でしたね。しかし、慾兵衛さん、私に惡氣はないといふ事はわかりませんか。私が慾兵衛さんの幸福を望んでゐる事はわかりませんか。

慾　どうせお前さんはお人好しで、私は惡者ですよ。さつさと歸つてくれ。

正　この灰を少し戴いて行つて宜しいか。



慾　ほしけりや持つて行け。そしてみんなに俺のした惡い事を吹聽するがいゝ。

中　正兵衛さんは默つてゐたつて、私は默つてはゐない。

正　慾兵衛さん、さうあなたのやうにひがんで取るものではありませんよ。

慾　貴方の言ふ事を聞くのは、もうこり〲ですよ。人の餅を蛆にして、怒るな、ひがむな、貴方の心掛が惡いから……よく言はれたものだ。

中　何。

正　中兵衛さん、怒るものぢやありませんよ。さあ行きませう。さよなら。

慾　怒るものぢやありませんよ。はゝゝゝ。

（中兵衛ふり返る。二人退場）

四

(二の場へ戻る。二人登場)

中　隨分ひどい奴ですね。

正　併しあゝ取ればあゝ怒るのも無理はありませんね。自分が餅を蛆にしたとは思はないで、私が策略で慾兵衛さんを陥穽に陥れたと思ひ込んでゐるのですから。

(正兵衛の手から灰が落ちる。その灰がかゝる枯草は青々として來て花が咲く。正兵衛の歩いた處に花が咲く。中兵衛ふと氣がつき)

中　正兵衛さん、正兵衛さん、不思議な事がありますよ。

正　何です。

中　こんな時候に花が咲いてゐますよ。

正　どれ、本當に咲いてゐますね。

中　貴方の歩いた處には皆咲きましたよ。

正　**どうしたのでせう。**



中　不思議な事があるものですね。貴方の心掛がいゝから、歩く處が皆花になり、慾兵衛さんが歩く處は蛆になるのでせう。

正　わかりましたよ。きつとこの灰がかゝると、花が咲くのですよ。ためしにこの枯木に灰を少しかけて見ませうか。

中　えゝ。

正　(かける。花が咲く)そらこの通り、花が咲きますよ。この木にも灰をかけて見ませう。(花が咲く)

中　不思議な事もあるものですね。

(沈默)

大名　花咲爺と慾ばり爺を呼べ。

侍　はつ。(退場)

奥方　花咲爺は本當に花を咲かせるで御座いませうか。

大名 それは自分で見ない間は信じられない。しかし現在見た者がある以上は、嘘だと云ふことも出來まい。しかし不思議なのは枯木に花を咲かせることではない。

奥方 それなら何が不思議なので御座います。

大名 それは、今時に花咲爺のやうな人間がこの世に居ると云ふことだ。自分の大事にしてゐる犬を殺されても、少しも怒らず又恨まずに、又臼を平氣で貸すと云ふことだ。そしてその丹精した臼を燒かれても怒らないと云ふことだ。それに、花咲爺の不斷の心がけや行を聞けば聞く程感心な者だ。さすがに枯木に花を咲かせるだけの者だと思へる。わしはこの世にそんな人間があるとは思はなかつた。花を咲かせることも珍しい。しかし花咲爺の心こそなほ美しい、なほ賞めなければならない。

奥方 本當で御座いますね。それにしても慾張爺はひどい人で御座いますね。



大名 ひどい奴だ。だが、わしにはそいつの心の方がわかる。しかし、そんな善い人のわきに居ながら、その人を信じることが出來ないで、常に疑ひ憎むと云ふのは又珍しい男だ。花咲爺に花が咲かせられゝば、自分にも花を咲かせることが出來ると、性も懲りもなく思つてゐる。同じ灰さへ持てば同じことが出來ると思つてゐる。灰を生かすのは花咲爺の不斷の心がけだ。又其處が貴いのだ。

奥方 あなたはその慾張爺もお呼びになつて、こゝで花を咲かせて見ようとおつしやるのですか。

大名 さうだ。俺は同じ灰がちがふ人間によつてどんな働をするか、この目で見たいのだ。

奥方 慾張爺に花が咲かせられるでございませうか。

大名 誰も見たものはない。けれど咲かない處も見たことはない。しか

し世間の噂が本當なら花は咲くまい。 灰は蛆か何かにかはらなければならない。

奥方 蛆にかはられてはたまりませんね。

大名 しかし何か並の人とはかはつたことをするだらう。 善意を惡意にとり、恩を仇に思ひ、善人を僞善者にし、强情我慢を通す奴だから。

(花咲爺と慾張爺、同じやうな姿をし、同じ笊に灰を入れて持ち、登場。 大名の前に畏まる)

大名 正兵衞、慾兵衞、今日は御苦勞である。

兩人 はつ。

大名 誰か、正兵衞と慾兵衞の灰をまぜてやれ。 正兵衞の持つてゐる灰を半分慾兵衞のに入れ、慾兵衞のを半分正兵衞のに入れて、よくまぜてやれ。

侍 はつ。

(侍云はれた通りにする)



大名 正兵衞、それならお前から先に、あの木の東に出てゐる枝に花を咲かせてやれ。

正 畏まりました。 出來るだけやつて御覽に入れます。 しかし私の力では御座いませんから、仕損じましても御宥し下さい。

(枯木に梯子が懸けてある。 正兵衞それに乘り、何か念じながら灰をまく。 花が咲く)

大名 (立ち上り) でかした、花咲爺。 今日からお前は世間の云ふ通り花咲爺と名乘るがいゝ。 でかした、でかした。

正 (下りて畏まり) 恐れ入ります。

大名 お前が花を咲かせたのを見ても、お前の不斷の心がけがわかるやうに思はれて、わしも嬉しく思ふぞ。 用意の寶物を持つて來て、花咲爺に與へよ。

侍 はつ。

大名 どうだ皆の者、心を美しくもてばいつか知れずには居らないものだ。

それにしてもよくお前は長い間辛抱したな。わしはそのことを、花が咲いたより嬉しく思ふぞ。自分が花を咲かせたやうに後の世にまで語り傳へて威張りたい氣さへする。

（侍寶物を正兵衛の前におく。慾兵衛横目でじろ〳〵見て居る）

**大名**　花咲爺。花を咲かせた褒美ぢや、僅だが納めてくれ。

**正**　過分に存じますが、御言葉に背くのも恐れ入りますから、有りがたく頂戴致します。（御辭儀をし以前の位置にさがる）

**大名**　さて慾兵衛。その方も、花を咲かせて見よ。花咲爺にやつた寶物よりも、もつと價の高い寶物をやるぞ。

**慾**　この灰に正兵衛の呪の息がかゝつて居りませんければ、きつと咲かせてお目にかけます。

**大名**　お前はまだ正兵衛を恨んでゐるな。

**慾**　花が咲けば、この恨もなくなるで御座いませう。それ迄は恨まないわけにはいきません。私は正直者です。腹に思つたことは何處でも云はないではゐられません。

**大名**　それは感心な心がけだ。花を咲かせよ。

**慾**　咲かせてお目にかけます。褒美は必ず下さるで御座いませうね。

**大名**　花さへ咲かせたら必ずやる。

**慾**　正兵衛さんのよりもつといゝのを下さいますね。

**大名**　もつといゝのをやる。花を咲かせたら。

**慾**　（獨白のやうに）そんな事が出來ないで。俺でも人間だ。

（慾兵衛、同じ恰好して梯子にのり、無造作に灰をまく。花が咲かない。皆笑ひ出す。しきりにまく。いらだつて殘らずまく。灰が正兵衛をぬかして皆の目や口に入る。到頭殿様の目に入る。耐へて居た殿様、烈火のやうに憤り、立上る）

**大名**　もう灰をまくのはよせ。誰か早く慾兵衛をとりおさへよ。聞きしにまさりしひどい奴だ。早速、慾兵衛の首をはねよ。

（侍、慾兵衛をおさへつける）

**慾** どうぞお助け下さい。 お助け下さい。

**大名** いや〱、わしは、腹に思つたことはお前のやうに行はないわけにはいかない。 お前が犬を殺したやうに、わしはお前を殺さなければならない。

**慾** お助け下さい。 お助け下さい。 命ばかりはお助け下さい。

**大名** いや〱、わしは助けることは出來ない。 すぐ慾兵衛をつれて行つて首を刎ねよ。

**侍** はつ。

**正** 一寸お待ち下さい。

**大名** なんだ。

**正** どうか、慾兵衛さんの命はお助け下さい。 お言葉に背いて失禮では御座いますが、お殺しになるのはお宥し下さい。



**大名** お前は、慾兵衛の殺されるのを氣持よく思はないか。

**正** 思ひません。 慾兵衛さんは腹の底からわるい方ではございません。 あの姿を見たら、誰でも同情しない方はない筈だと存じます。 どうかお殺しになるだけはお宥し下さい。

**大名** お前にやつた寶物をのこらず返せば、慾兵衛の命はゆるしてやる。 どうぢやな。

**正** お返しします。 お返しします。

**大名** 慾兵衛、正兵衛に禮を云へ。

**慾** それが正兵衛の策略だ。 誰が禮を云ふものか。

**大名** それなら貴様は首がはねてもらひたいのか。 禮を云ふのがいやなら、首をはねるぞ。

**慾** （怒つたやうに）正兵衛さん、有りがたう。 御蔭で、お前さんは寶物を失つたね。

大名　そいつを連れて行け。

侍　はつ。（侍慾兵衛をつれてゆく。沈默）

大名　花咲爺。わしはお前が花を咲かせたよりも、寶物をかへしてまでも、慾兵衛の命を助けようとした心を嬉しく思ふぞ。誰か、もつと寶を持つて來てやれ。

侍　はつ。（侍、間もなく以前にまさる寶物を持つてくる）

大名　花咲爺。わしはお前のやうな人間をこの目で見、この心で感じることが出來たのが嬉しいのだ。この寶はお前の心に任せる。

正　はつ。（平伏する。涙ぐむ）

（沈默）

幕

（童話劇三篇）

現代文新鈔 巻一 終



大正十三年一月七日
文部省檢定濟

大正十一年十二月廿五日印刷
大正十一年十二月廿八日發行
大正十二年一月十五日訂正再版印刷
大正十二年一月十八日訂正再版發行
大正十二年十一月廿七日修正三版印刷
大正十二年十一月三十日修正三版發行

著作權所有

| 定價 | | 大正十四年度臨時定價 |
|---|---|---|
| 卷一 | 金三拾七錢 | 金六拾七錢 |
| 卷二・三・五 | 金三拾五錢 | 金六拾三錢 |
| 卷四 | 金三拾三錢 | 金五拾九錢 |

編者　東京市小石川區高田老松町五十二番地　吉田彌平

發行者　東京市神田區通神保町六番地　上原才一郎

發行所　東京市神田區通神保町六番地　光風館書店
（電話園穴手七三四〇番）
（振替口座東京三二七番）

印刷者　東京市神田區通神保町六番地　四海民藏

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附致可候

秋撫尋常小学校
廣崇武義所有

一年一組
廣東武義

広島大学図書
2000302229

文庫
24
229